

くもりなき月日は照らせ國のため

さらしゝかばね朽ちはつとも

この撰文は山川大藏、即ち當時の陸軍少將山川浩閣下でムいます
實に勇敢無比壯烈なる白虎隊の行爲は、吾が大日本帝國の武士道の
本領でムいまする、これぞ大和魂の精隨でムいます。

破格の叙勳

(家中少尉)

第壹

謹で 陛下に奏す青島守備軍は砲臺を破壊され且つ彈藥竭き降
伏の止むなきに至れるを遺憾とす日本は海陸より猛烈に砲撃せる
も兵は砲臺の損傷に比し損害少し

これは青島總督ワルデック大佐が、獨逸皇帝陛下に對しての電奏
でムいます。

世界に於ける陸軍の精銳を以て誇る獨逸國も、勇敢なる我が日本

帝國の軍隊には到底敵すべくもムいませんで、遂に白旗を懸げて和を講ふに至つたのでムいます。

我が青島攻圍軍は、上は神尾司令官閣下を始めといたし、下は一兵卒に至る迄、何れも武勇赫々たる勇士計りでムいますが、中にも偉勳第一の人、武勇無比の人として、未だ先例に無い破格の叙勳を賜はつた人がムいます。

これは、久留米歩兵第四十八聯隊附家中見習士官でムいます。

十一月六日、山田少將の率る第二中央部隊に屬しまする歩兵第四十八聯隊は、深夜敵の砲撃の打ち絶へましたを利用いたし、呐喊突

撃肉弾を以て壘壘を破るべく、決死隊を編成いたします。

其の際に家中見習士官は、この決死隊の一個少隊の指揮者たるの光榮に接しまして、

家『襲撃ッ』

令を下し自ら先頭に立つて勇み進みます様は、恰度疾風が枯れた木の葉を捲く如くの勢でムいます。

勇敢なる家中見習士官の下には、皆亦勇敢なる兵卒計りでムいますから、命令と共に中央堡壘に突撃いたし、忽にして該堡壘の第一外壕外岸に、蜘蛛の巢の如に敷設しムいます鐵條網を破壊し、次

ひて其の勢で、

家「第二外壕斜堤上の鐵條網を破壊せいッ」
と、更に命令を下します。

甲「其れ第二外壕だッ」

乙「可しッ、こんどは俺れが先登に鐵條網を切斷するぞ」

丙「何にッ飯田が一個所破壊する間に、俺れは四五個所も破壊するのだ。鐵條網破りと來ては此の加藤が、將に天下第一だ」

飯「加藤ッ馬鹿を言ふな。この飯田は動物園のライオンよりは偉らしいのだぞ。齒でボツリ〜鐵條を噛み切つて見せる」

まさかに斯如なこともムいますまいが、部下一同の勇敢なる働きは思ひやられます。

第 貳

家中見習士官の引率いたしまする一部隊は、遂に第二外壕斜堤上の鐵條網も首尾よく破壊いたし、

獨「大變あります。日本兵來ました。皆さん逃げるよろしい」
獨逸兵は周章狼狽いたして居ります。

家「それ進めッ。躍り込めッ」
遂々敵壘に躍り込んで、瞬時の間に確實に之れを占領いたしましたし

た。

この占領に接しましては、家中見習士官が、躍り込め……と命令
いたしますから、

甲「オイ、躍り込むのだとよ」

乙「俺れは生憎踊りの稽古をせんから、何一つ踊れない」

甲「俺れも同様だ。活惚れ位なら少しは知つて居るから、ヨイヤサ
ーヨイトナ、ヨイノ……」

丙「馬鹿ッ、跳り込めと命令があつたとて、活惚で敵壘に突撃する
奴があるか」

甲「でも命令ぢや」

丙「貴様は躍り込めとは、跳ね込めといふことを知らんな」

甲「活惚をしても、跳ね廻つて居るではないか」

これは餘事のお笑草でムいます。

偕て敵壘を占領するに際して家中見習士官は、部下の勇氣が振ひ
出でる様に、絶へず三尺の秋水を引抜いて陣頭に立たれ、殊に愈々
敵壘に接近いたすや、唯一人で大膽不敵にも先頭第一に敵壘に闖入
いたし、

家「續けッ」

家中少尉

と、奮戦いたされます。

すると敵獨逸兵の中にも、左様々々弱虫計りもムいませんで、踏み止まつて、

獨『小さい日本兵私し恐れません』

家『何にツ、サア来い』

激戦いたします。

斯様な勇敢なる獨逸兵計りでムいませすれば、ワルデツク總督も今

少しは永く籠城もいたされたでムいませう。

其の際に家中見習士官は、十數名の敵兵にと包圍いたされ、頗る

苦戦奮闘を續けましたが、残念ながらも衆寡敵せずして、遂に名

譽の戦死を遂げられました。

家中見習士官の勇敢なる行爲は、ために全軍進路の嚮導となりまして、尙後方堡壘を奪取するに至りました。

斯の如き勇敢無比なる奮戦をいたし、遂に名譽の戦死をいたされ

た家中見習士官の殊勳は、

天聽に達しまするや 陛下には其の功績を嘉し給はれ、直に陸軍

歩兵少尉に任せられ、そして特に歩兵少尉として、未だ先例のムい

ません功四級に叙し金鵄勳章を賜はり、尙勳六等單光旭日章を授

けられました。

實に死して餘榮ありと申すべきでことと申します。

家中少尉が殊勳は、永く日獨戦史の一頁を飾るで申いませう。其

の武勇は赫々として、青島の露と消へまして末代消へ失せること

は申いせん。

伊賀の水月

(荒木吉和)

第 壹

時は寛永十一年十一月七日、鶏鳴曉を告げ夜はほのくと明け渡り参ります。

けふは伊賀上野の城下では、狩獵が申いますと見へまして、市中の町家は何れも堅く表戸を閉し、市中見廻役としては梶原源右衛門七里鎌倉兵衛が、數多の組子を引き連れ馬上凜々しく打扮ち、みなそれ／＼固めを附けて居ります。

さて御本丸より御出ましに相成り大手廣場には、藤堂大學頭殿御馬上に裏金の陣笠を召され狩獵の御装束、其の御側には老臣始め馬廻り其他家中の面々が凡そ千人以上も控へて居ります。

ところへ馬喰町一丁目の木戸を這入り、城下へと乗り込むで参りましたは、渡邊數馬が仇敵河合又五郎の一行でムいます。その一行が残らず木戸口を通り過ぎますと、

「其れッ」

と、藤堂立蕃殿が下知いたされ、忽ち木戸口は堅く閉切れ、木戸を後といたして五百人の大勢が備へを立て直し、尙三丁目の木戸も

閉され一同を取圍んで仕舞ひます故、いと不思議に思ふて居りますと、遙か彼方より一蓋の編笠を頂いた大兵の一人の武士が、此方を目蒐けて馳せ参ります。

すると河合の附人でムいます櫻井甚左衛門が、眞先きに進んで居りましたが、件の武士はハツと笠を取つて投げ捨て、

「吉オ、珍らしや櫻井甚左衛門、我れは荒木又右衛門吉和なり覺悟しろ、エイッ」

一刀で馬上の甚左衛門は左の足を斬り落されましたから、何條以て堪るべきズンデンドンと落馬いたしました。

吉如何に一同の方々、けふは渡邊數馬の仇討である。仇敵河合又五郎それへ出で尋常に勝負いたせツ、拙者は義によつて數馬に助太刀いたす荒木又右衛門吉和である。恥辱を知る人はこの吉和にお蒐りあれ、一人として容赦はいたさぬ』

大音聲で呼はりまするから、河合又五郎を始め附人一同は、馬上から飛び下りて身仕度に及びます。

第貳

金蓮寺の方よりは渡邊數馬が、伯耆三郎安綱の一刀を提げ駆け附け参り、

『河合又五郎は何處に在るや、渡邊數馬これに在り。尋常に勝負に及べ』

と呼はりまするから河合又五郎は、後鉢巻き玉襷と充分に身仕度いたし、九尺柄の槍を手にいたし、

又『珍らしや渡邊數馬、望みとあらば勝負いたし呉れん』

突き出します手練の槍先き、一二合打ち合つて居りましたが、數馬は體を引くと同時に、逃げいだしますから、

又『ヤア卑怯であらう數馬、逃ぐるとは何故か』

數『イヤ決して逃ぐるにはあらず。こゝへ來つて勝負に及べ』

又「猪牙才千萬、何處なりとも行かん」

河合又五郎は渡邊數馬の後を追ひ掛けます。

金蓮寺の門内迄又五郎は追ひ参りますと、大樹を小楯に取りました數馬は、

數「サア來い、來れッ」

と身構へいたします。

第參

此方の荒木吉和へは、附人の面々が、

甲「其れッ向へ」

第一番に一條流の達人宮木忠助、大星流山岡重兵衛の兩人が、左右から斬つてかゝります。

吉「心得たり」

と、吉和は三池傳太光世の一刀振り上げ、

吉「ヤイツ、エイッ」

左右に振つたと見る間に、兩人は早や冥途へ旅は道連れと急ぎ行きます。

こんどは種田市兵衛が、槍を突いて打ちかゝりますと、飛び込み参りました吉和の一刀に、市兵衛は槍の柄を中央から斬り落されて

手早くも、腰なる一刀抜き落さんと致しましたが間に合ひません。

吉「それエイッ」

吉和の打ち下しました一刀に、市兵衛は身體が真二ツに割けて仕舞ひます。

伴「荒木覺悟ッ」

關口流の中津川伴五郎に、今井田流の大森彦一の兩人が一度に打ちて掛りますと、又しも佐分利流の槍を抜いて突入つて参りましたは味川瀬兵衛でムいます。

この三人も胴斬りに、首落し、うしろ袈裟の三種に斬られて仕舞ひます。

ひます。

第四

そこで一と息きいたして居りますと、

勇「ヤア、我れは無敵流の川田勇吉なり。荒木又右衛門勝負に及

べ」

彼奴も胴斬りとなります。これでは餘り無敵流も偉らくはムいま

せん。

五「ヤア、荒木又右衛門、我れは旗本一同の御依頼により、河合又五郎に、助勢をいたす東流の達人東谷五郎右衛門といへるもの

イザ尋常に勝負に及べ』

吉和も五郎右衛門の武勇に優れて居りますは、豫て聞き及んで居りゐするから、こは油断ならじと片目はづしの青眼につけて、二三合渡り合ひますが、こんどは武勇に優れた同志でゐいますから、中の勝負でゐいます。

そこへまたもや、卜傳流の達人でゐいます野田一角が、

『東谷氏、拙者御助勢申す』

左右に大敵を引受けましたから、流石武勇天晴れの吉和も苦戦いたして居りますと、

『珍らしや荒木吉和、我れは武内玄丹であるぞ』

武内玄丹と申す附人の一人は、一刀を振り翳し正面から斬つて掛ります。

正面と左右の三方に大敵を受けました吉和は、聊か危く見へましたから、梶原源右衛門は心配で堪りません。

そこで一計を案し、

『ヤア、荒木又右衛門安心いたせ。渡邊數馬は既に河合又五郎を討ち取つたり』

梶原の言葉によりまして、敵と味方の勢ひは大變な相違が生じます。

す。勇氣が勝りました吉和は、

「エイッ」

玄丹を唐竹割に、五郎右衛門を胴切りに、一角の頭上には一太刀を見舞ひます。

第五

先程から此の勝負を熟つと眺めて居りましたは、穴澤流の達人で
ムいます星合段四郎といふ老人。慶元兩度の戦には、大阪へ入城い
たし真田の組下となり。既に佐竹の御陣中で、三段まで一人で打ち
破つたといふ戦場生残りの勇者でムいます。

段「イデヤ此の上からは、この段四郎が手をおろし呉れん」

薙刀小脇に抱ひ込み進み参り、

段「如何に荒木吉和、天晴なる其方の武勇、仇を討たんとする義心
あるものに、向ふといふは實に好まざる次第なれど、如何にせん
吾れは旗本一同よりの依頼により、止むを得ず又五郎に助勢いた
す星合段四郎である」

これは吉和には非常の大敵でムいます。

太刀と薙刀の戦ひは凡そ三十合計り。これを眺められました藤堂
大學様は、

大ウーム、實に天晴れなる武勇者の一騎討ちかな」

非常に感心いたされて居りましたが、吉村は次第々々に受太刀となり、段四郎の方は益々勇氣が加はつて参ります。

段四郎が一生懸命と打込みます薙刀を、吉和は身を捨て、浮ぶ瀬もあれと、忽ち手許へと飛び込み、横に拂ひました三池傳太光世の一刀は、遂に薙刀の柄の中途から斬り落しました。

失策つたりと段四郎老人は、薙刀を投げ捨て一刀を抜き放ち斬合ひに及びましたが、太刀打ちとなりますれば吉和の勝でいますから、今度は段四郎の方が受太刀と相成り、次第々々に斬り込まれ遂

に斬り倒れました。

すると附人の淺香三十郎、今井百翁軒、鴨儀助、櫻井甚助、牧野八十兵衛、間宮傳八、澤田奎之進、寺村勘四郎等の面々が、一時に四方八方から斬り込んで参ります。

吉和も此時は早や死物狂ひでいますから、當るに任せて斬り倒し四五人を彼の世へ送りますから、残つた連中は其れに恐れて逃げ出しました。

第六

荒木吉和は、早や多くの附人を斬り倒しましたが、此の上は數馬

の方が心配でムいますから、金蓮寺の門内へと乗込み來たりますると、輕傷ながらも數馬は四五個所斬られて、必死の場合でムりますから、

吉こりや數馬、我れは既に附人を皆な討ち取りたり。唯つた一人の又五郎を未だ討取る事が出來ざるか、汝討つこと叶はずば早く討たれて仕舞へ。跡は荒木が引受けたぞ』

この一言は、數馬のためには百人の力を加へたも同様でムいます。が、落膽いたしたのは又五郎でムいます。

又『エイッ』

最早これまでなりと又五郎は、槍を突き出しますると、數馬は伯耆守安綱の一刀で、横に拂ひましたが、十二分に精神が加はつて居りましたから、又五郎の槍の柄は中途から斬り捨てられます。

又『ヤツ残念ッ』

後へハツと退るところを、早くも飛び來つた數馬が、

數『エイッ』

と、左の肩先から四五寸ばかり斬り附けます。

吉オ、數馬出來した。後は吉和が引受けたり』

吉村が打ち下しました一刀で、又五郎の體は血煙り立つてそこへ

ズドンと、

第七

吉「其れッ、早く首級を上げい」

喜び勇む數馬は、

敵「いまぞ晴らす恨みの一刀、受けて相果てよ」

言ひつゝ又五郎の首を打ち落します。

ところへ馬を飛ばして馳け参りしは、これを梶原源右衛門でムいます。

源「渡邊數馬天晴れ〜」

扇を開ひて譽め立てます。

尙更に大聲で、

源「如何に又右衛門、仇敵は首尾よく討ち取つて目出度いが、まだ討ち漏した奴もある。はやく予と同道いたして討ち取れ」

吉和を引き連れて、彼方此方と残る敵を皆な討ち取らします。こ

れで三十六名の附人は、仇敵の又五郎と皆一所に冥途へ出發いたすことに相成りました。

そこで藤堂大學頭殿からも御言葉がムいまして、荒木吉和と渡邊數馬は負傷のお手當といふことゝ相成り、數馬の傷手は藤堂家のお

附醫者が手當をいたします。

また荒木吉和は、自ら血汐に染まりました衣類を脱いで、素裸體と相成り五六杯の水を浴び、イザお手當といふ段になりますと、

「これは不思議ぢや、金蓮寺の水は餘程負傷の妙薬と見へるわい三十六人を斬り殺したによつて、定めし手傷も澤山受けて居らうに、一つも傷が見當らん」

側そばに居をりました梶原源右衛門は、

「何なににツ、傷きずが見當みあたらんと……、著衣ちやくいが斯かく迄まで血汐ちしほに染そむで居をるではないか」

「如何いかにも左様さやうでムる。衣類いれいの血汐ちしほは皆みな敵てきの血汐ちしほとは思おもへぬがこりや不思議ふしぎぢや。矢張やはり金蓮寺きんれんじの水みづが利きいたのか」

「イヤ左様さやうではあるまい」

「と申まをしても、傷きずが見當みあたらぬ。これからは金蓮寺きんれんじの水みづを澤山たふさん汲くむで、負傷者ておひしやに賣うり附つけたらば、定まめてよい金儲かねもちけが出來できるでムらう」

むかしから薬九層倍くすりここのへと申まをして、醫者いしやは利益りやくの多おほいものといひますが、中々なかなか慾張よくばりお醫者いしやと見みへまして、井戸いどの水みづを薬くすりにして、零たひで金かねを儲たくわけようと思おもつて居をります。

第九

荒木又右衛門吉和の身體には、決して金蓮寺の井水が利いたので
はムいませぬ。

吉和の身體には、兎の毛で突いたほどの傷もムいませぬ。決して
敵にひと太刀も討ち受けませぬからでムいます。

藤堂大學頭殿を始めとしたし、何れも荒木又右衛門吉和の武勇に
驚かぬものは一人もムいませぬでした。

このお話は、伊賀の水月と申しまして、荒木又右衛門が信義を守
り、渡邊數馬のために仇討ちの助勢をいたし、仇敵河合又五郎の附

人でムいまする三十六人の武藝者を、一人も残さずに討ち果したと
いふ武勇のお話してムいます。

武勇に優れたました荒木又右衛門吉和に就きましては、伊賀越の仇
討ち計り丈けでも、いと澤山のお話しがムいますが、このたびはこ
れでお預りいたし置きます。

人格と修養

信義

海軍三羽鳥

(廣瀬中佐)

只今の江田島海軍兵學校の前身で、即ち築地の兵學寮に、山形小太郎といふ漢文科の先生がムいました。

この山形先生は、維新前後は朱鞘の長刀を腰に、京洛の往來を濶歩して大に尊王攘夷を説かれた方です。

特に兵學寮から聘されて、其の愛宕下に寓居を定められ、日々學校へと御通勤でムいます。ところが此の先生は至つて規律の正しい方で、朝は何時に起床て何時に朝食を濟せ、それから何時にお宅を出られるといふ様に、確然規律が整然て居ります。即ち萬事が軍隊式でムいました。でございますから先生が學校へ往復いたされます途中の家々では、

亭「オイ〜お八重や、早く釜の下を焚き附けろよ。山形の先生がお通りだぞ」

女「もう良人、チャンと御飯の仕度が出来て居ますよ。早く喰べて行かないと、時間に遅れますよ。先生がお通りだから八時ですと」

また左様かと思ふと、
女「ママ最早先生がお歸りだから三時半になるのに、亭主は何處に愚圖々々何にをして居るのだらう」

先生は時計の代用となられます。

借て或る日の事でムいましたが、山形先生のお宅へと尋ねて参りましたは、年の頃が十二三の紺飛白筒袖着に草鞋穿き、そして振り分け荷物を肩にいたして居ります一少年

少「山形の小父さんのお宅は、此方でムいますか」

と、取次の玄關番に尋ねます。

書「左様である。山形先生のお宅は此方であるが、何にか用事ですか」

少「ハイ、山形の小父さんに面會に掛りたいです」

書「左様か、暫く待ち玉へ」

書生は少年を玄關へと待たせて置いて、先生の居間へと参り、

書「先生ッ」

山「何んだ近藤ッ、大きな聲を發して……」

書「ハイ、只今玄關に十二三歳の可愛らしい少年が参り、小父さんに御面會がいたしたいと申します」

山「何に……、十二三歳の少年が……、何んな服装をいたして居るか」

書「ハイ、紺飛白の筒袖を着まして、顔の真中に鼻が一つ、其の下に口が一つ……、耳も眼もムいます」

山「馬鹿ッ、そんなことを聞くではない……。ハテナ俺しに遇いたい……。小父さんに遇ひたひと」

書「左様に正に確實にムいます」

山「ウム、して其の姓名は何んと申した」

書「失策つたッ」

障子の紙も裂けんばかりの聲で、

山「馬鹿ッ、大馬鹿ッ。姓名も問はずに取次ぐ奴があるか」

先生は致し方ムいせんから、御自身で玄關へと御出掛けでムいます。すると少年は左も懐つかし氣に、

少「山形の小父様……」

といひますが先生は、一寸此の少年が誰れでムいますか、思ひ出されません。

山「……」

少「小父さん、お忘れになりましたか……。武男です、廣瀬の武男です」

山「オ、左様ぢやつたか……。成長なつたので忘れたわい、マア能う訪ねて来た。サア昇れ」

廣「ハイ有り難うムいます」

山「して武男は、誰れと一所に來たのぢや」

廣「一人で参りました」

山「それは知れて居る。俺しの家へは一人で來たのぢやらうが、兄さんか姉さんにでも連れられて東京へ來て、そして馬喰町へでも宿

舎を取り、宿舎から武男が獨りで來たのぢやらう」

廣「違ひます々々々々。否々左様では無いませぬ。國から獨りで参りました」

山「何にツ、國から……。飛彈の高山からか」

廣「ハイ左様でムいます。飛彈の高山から一人で参りました」

山「眞實にか」

廣「ハイ違ひありません。信州甲州の山々を越して、恰度十三日かかりました」

山「ホウ、偉らい々々々、それは感心ぢや。國から獨りでやつて來

るとは……。これツ近藤ツ」

野「ハイイ」

山「一體貴様は幾歳に成つたのぢや、此の武男を見ろ。未だ年が漸く今年十三ぢや、それであるのに飛彈の高山から十三日も要つて獨りで東京へ來たではないか」

野「ハ、ア、拙者は今年二十三歳でムいます。昨年は二十二で、來年が二十四と、三百六十五日で一歳づゝ……」

山「馬鹿ッ阿呆奴。歳ばかり重ねても取次一つ出來ん奴ぢやアないか、武男の眞似をすれ少しは武男にあやかれ。これツ武男に洗水

を持つて来てやれ、そして足を洗つてやつて、其濁水でも有り難く頂戴し、少しは偉らしいものになれ』

武男は自ら足を洗ぎ、奥の間へと通りますと、振別け荷物の紐を解きまして、取り出しましたは一通の封書。

廣「小父さん、これはお父様からのお手紙でムいます』

山「オ、左様か、久しく親父にも面會せん。手紙を見るのは樂しみのものぢや』

と、早速封を披ひて見て居りましたが、

山「武男、お前の親父も年を取つたなア。どうも手紙の墨色が馬鹿

に薄いではないか』

廣「小父さん、違ひます々々々々。それは裏でムいます』

山「何にツ……、裏か……。どうも非常に薄いと思つた』

表を返して、切りに書状を讀むで居られました先生は、何に思ひけん礎と膝を打ち。

山「武男ツ、貴様も偉らいが、貴様の親父も威らい。未だ漸く十三歳の貴様を手離して、江戸迄遣し俺しに教育で呉れるとは實に感心なものぢや。可し俺れが充分に教育でやらう』

百獸の王でムいます獅子は、其兒を産みますと三日間これを養ふ

ての後に、其の兒を千仞の谷間に蹴落しまして、匍ひ上ることの叶はぬ兒は、再び養ふて親が兒といたさなといふ例言がムいす。

廣瀬武男の御親父は、正に此の獅子の棄兒の例に依れてをります實に親子兩人とも偉人ではムいせんか、

武男は、此の嚴格なる山形先生の撫育を受けまして、兵學寮へと這入り、好成績で少尉にと任せられたのでムいす。

武男に兵學寮時代からの仲能しの友達が二人ムいす。即ち八代閣下と財部閣下でムいす。

これは海軍部内に三羽鳥と謠はれました位で、三人共に其の成績

が、群を抜ひて優れて居りました。

少尉に任せられました三羽鳥は、共に々々海軍本部に其の職を勵むで居られました。大尉と昇進いたすと、八代閣下の一人丈は霞ヶ關なる海軍省を飛び出されて、海路を指して艦隊勤務となられます。

財部、廣瀬の兩大尉は、共に俱に同室内に椅子を並べて居りました。或る日のこと財部大尉が、

「財部、オイ廣瀬、貴様は今日もう用済か」

廣「ウトム、終りぢや。除々歸るとしよう」

財「では俺れの宅へ寄つて呉れんか、少し話したい事があるのだから……」

廣「左様ぢや、久しく阿母さんにもお眼に掛からんから行くとしよ。ぢやがなア、何にか御馳走して呉れるか」

財「左様ぢや々々々々、貴様の好きな豚肉でも奢らうよ」

廣「これは結構ぢや、豚肉なら盛んに喰うぞ。澤山奢れよ」

無邪氣なことを言ひつゝ、其の日の職務を終へて兩大尉は、海軍

省を後にテク／＼と膝栗毛でやつて参りましたは、高輪の財部大尉

の宅でムいます。

間もなく豚肉が山の如く運ばれます。又正宗が爛をされます。兩人は大に飲み且つ大に喰つて居りましたが、

廣「オ、左様ぢや々々々々。全然忘れて仕舞ふた。餘り牛飲馬食で

主要の話を聞くのを……」

財「ウム、貴様に話しと言ふて別でもないが、貴様と八代と俺れ

と三人で、堅く約束をした事があるぢやらう」

廣「それは有る有る、大に有りだ。若しも一朝國家に事のあらんか

三人は俱に枕を並べて 陛下に……」

財「勿論ぢや。それは軍人たるものゝ本分である……。それ計りで

なうて、外に……」

廣「まだある有る。無妻主義々々々々、軍人といふものは國家の干城であるから、何日何時出戦を致ばならないか知れぬ。若しも其時にちや、妻だの子だのがあつては駄目ちや。後髪を曳かるゝの思ひして充分な奮闘が出来ぬ。ちやに依て女房を娶るまいといふ約束を……」

財「貴様は、それを未だ守つて居るか」

廣「失敬なッ。軍人たるものは、勅諭にもある如く信義を重ずるものちや。信義を輕せんぞ。一旦約束した事を何んで……。また……」

……居るかといふかは疑問詞だぞ。此の廣瀨を貴様は何んと思ふのちや」

廣瀨大尉は拳を堅め肩怒らして、今にも呐喊いたさうといふ勢でムいます。

財「否々、廣瀨其の様に憤るな。何にも貴様が信義を何う斯うといふのではない……。實は其の無妻主義に就てちや」

廣「ウム、無妻主義が何うしたのか」

財「實は三人で無妻主義を堅く約束したが、俺れは何うしてもそれを破らなくてはならぬ事となつたのちや。其といふのは阿母様の

言はるゝに、此財部家には彪一人より誰れも居らぬ。して見るとお前が妻帯せんと、此の財部家の血統が絶て仕舞ふ。廣瀬様や八代様へは母からお託をするからは是非妻帯せいと、涙をば流して言はれるのだ』

廣『ウーム、成程……』

財『俺れは百萬の敵軍も何に恐れんが、母の切なる言葉は何うしても撃退が出来んで遂々降伏し、女房を貰らうことゝしたのだ』

廣『なんだ……、そんなことか……。それは俺れの様に冷飯喰ひの次男野郎とは違ふ。貴様は財部家の大切な嗣子だ。俺れ等に關は

ずに女房を貰へ、大に貰ふべしだ。三四人も貰へ』

財『イヤ、三人も四人も貰ふではな。唯つた一人で澤山ぢや……』

……が貴様が其様に言ふて呉れると却つて俺れは恐縮至極ぢや』

廣『貴様が女房を貰らへば俺れも仕合せだ。財部の令夫人は即ち俺れの姉分だ。俺れに姉が出来る譯だから、軍服の綻びも縫ふてもらえるし。又大に御馳走にもなれて宜いぞ、貰らへ貰らへ、併し何處から花嫁は御入來するのぢや』

財『其花嫁は貴様も知つて居るだらうが、山本の令嬢梅子だ』

今迄大に賛成を表し、其の顔には一人の姉が出来るので喜悅が満

ちて居りました廣瀬大尉は、山本の令嬢といふ言葉を耳にいたしま
すと、同時に忽ち一變いたし、態度を嚴然と改め聲も鋭く、

廣「何にッ 財部……、山本の梅子……、閣下の令嬢ではないか」

財「左様ぢや、閣下の令嬢ぢや」

廣「馬鹿ッ、閣下の令嬢を貴様は女房にする精神か……」

財「何にッ……。貴様は非常に閣下の令嬢と聞いて憤慨するが、令
嬢に何にか缺點でも有るのか」

廣「阿呆ッ、軍人が一婦人の尻を追ふて、其の操行を斥候するか；
……、閣下の令嬢たるものが何んで操行に非難があらう」

財「では何んで不満ぢや」

廣「財部、貴様は胸に悟り得ないか。得ないならば言ふて聞かそう
よ。能う聞け」

財「オ、聞かして貰らう」

廣「財部ッ、貴様は海軍部内での俊才ぢや、後來有望なる將校ぢや
未來の閣下たることは疑ひない。其にも拘はらず何にを苦しんで
閣下の令嬢を女房にするか、閣下の令嬢を女房にして汝が後來出
世いたしたならば、世人は何んといふか……。財部は女房のため
と……」

廣瀬大尉は更に語を續けんといたしますを、

財「オ、解つた。最早言はいでも胸に悟つた。有難い感謝致すぞ流石は信友であるぞ能う注告して呉れた。若しも廣瀬が注告して呉れなんだら、此財部は一生世人に顔向けも出来ん。ア、有り難い嬉しい。廣瀬安心せい俺れはもう貰はん。斷然中止ぢや」

廣「俺れは中止せよとは言はん。が唯不服ぢや、貴様が貰へば絶交する計りぢや」

財「それでは、殆んど中止せいと、嚴命するのと同じことだ」
兩大尉が對話の折柄、襖押し披ひて這入つて來たのは一老夫人。

それは即ち財部彪のお母様でムいます。

廣「オ、お母様で……」

母「廣瀬さん、久濶でムいました」

廣「イヤどうも御無沙汰をいたしました。不相變御機嫌能うて結構です。又今日は非常の御馳走に成ります」

母「イエ何ういたしましたして、毎時も何んの風情もムいません。マア緩くり召し上つて下さい」

廣「ハイもう十二分です」

母「就きましては廣瀬さん、甚だ失禮ではムいますが、只今彪への

御注告のお言葉は襖の外で……」

廣「エツ、お母さんが……」

母「ハイ残らず承はりました」

廣「オイ財部、お母さんに全然伺がはれて仕舞ふた」

母「實は廣瀬さん、此の縁談は此の母と山本の令夫人とで取極めましたので、別に月下雪人もムいませぬ。就きましては貴様の親切な御言葉により見合はすことにいたしますが……」

廣「イヤ僕は、見合せよとは命令せんのです」

母「イエ、彫が何んと申しましても、此の母が決して貰ひませぬ……」

……、就きましてはお願いがムいませぬのですが、何ぞ縁談破談に一つ貴方を煩はしたいもので……、どうも此母が取極めましたものを、また自分で取毀しに参りますのは……」

財「左様ぢや……、廣瀬を破談委員に頼まう」

母「是非山本家へ、御掛合をお願いいたします」

廣「イヤ……」

財「廣瀬ツ、貴様が此の要求を入れて呉れんと俺れは絶交いたすぞ」
これは大變なことになりました。

石が流れて、木の葉が沈む……。恰度正反對になつて参ります。

財「オイ廣瀬ツ、急げちや〜〜。早速山本の家へ打ち毀しに行
けツ……。お母さん下女に俵を命令して下さい」

廣「そんなに急がすとも宜からう」

財「大に急速を要するぞ」

其の中に俵が参ります。

母「廣瀬様、俵が参りましたから何卒……」

廣「ハ、……」

廣瀬大尉は、止むなく車上の人となります。

威勢の能い俵夫は、梶棒を握りますと、

車「エイツ」

と、掛け聲も勇ましく馳せ出します。早いので其は一と通りで
はムいませぬ。

廣「何うも今日の車夫は、素的滅法界に迅速だなア。これでは恰度
汽車にでも乗つて居る如だ」

忽ちにしてやつて参りましたのは、海軍大臣山本権兵衛閣下の官
邸でムいます。車夫は砂利を蹴つて勇ましく玄關へと俵を横附けに
いたしますから、

廣「馬鹿ツ、此の馬鹿俵夫奴ツ。此處は何處のお邸と心得るか」

廣瀬中佐

車「ハイ、海軍大臣の官邸で……」

廣「それを知つて居るなら、俺れの腕を見い。俺れの腕の筋をよく見ろ」

車「ハイ、大尉様でムいます」

廣「大尉だ……。大尉といふことを知つて居つて、何故大臣の官邸の玄關先きに、俤を横附けにするのぢや。馬鹿野郎ッ」

俤夫「こそ能い迷惑でムいます。とんだ飛沫が掛ります」

さて官邸の玄關番は、俤の轍が音に職務忠實に既に案内に突立て居りますと、

廣「海軍大尉廣瀬武男ッ」

と、官姓名を名乗り上げて閣下に面會を求めますから、玄關番は早速この趣を通じます。

山「オ、これ奥さんになア、部内で俊才な廣瀬武男が見へた。嬢が婿の財部とは無二の親友ぢや。汝も遇ふて置きなはれと」

玄「ハイ、御令夫人様に……」

山「オ、左様ぢや。それから廣瀬大尉は二階の應接間に案内して置きなはれ。俺が今直ぐに行くぢやで……」

閣下の室を下つた玄關番は、廣瀬大尉を應接間に案内いたし、そ

して令夫人に閣下の命令を申し傳へます。

應接間の椅子に腰打ち掛けて、何んといふて縁談を断らうかと切りに思案に耽つて居ります廣瀬大尉は、更に一つの憂慮を呼び起しました。

それは外ではムいけません。元來山本閣下は非常の能辯家でムいまして、流石舌頭三寸で日比谷原の大議場を騒がして居ます代議士連すら、往々閣下の能辯で、まるめ籠まれるといふ位でムいますのに反して、廣瀬は至つての訥辯家、その上先方は大臣閣下でムいますのに、此方は大尉の一士官でムいませう。口舌ること既に敵しな

い上に階級が異なりますから、これは中々困難な舌戦でムいます。

と、申しても廣瀬大尉は、唇寒し秋の風……と申しまして、一旦口から出したことは、今更ら反古にもいたされません。且つ又それでは信義に缺けますから、大に作戦計畫を胸中にいたして居りますと、

扉が開くと、這入りこられましたは山本閣下でムいます。見るからに非常に御機嫌よく、

山「オ、廣瀬どん、能う來られた。貴方の兄の勝彦どんとは俺が碁の友達で喃、イヤハヤ兩人とも筑同士でアハハハ。能う其方の噂

が出よつてなア、一度は遇て見たいと思つちよつて居つた。能う見へられた……。オ、それ／＼貴方と仲能い財部が、こんど俺の嬢を妻にするぢや。俺も貴方如うな能い友達を持つて居る財部へ嫁にやるのは嬉しいわい。後來何分とも宜う頼みますぞ』

成る程と、廣瀬大尉は噂に優る雄辯家の閣下と、早や既に氣が挫けられます。

軍の勝敗は其の機を制するに在り……。即ち勝負といふものは其機を制することの如何によりまして、大に利害得失がムいます。既に早や廣瀬大尉は閣下にやられて仕舞ふて居ります。

『それから喃、後來の帝國海軍は貴方がたの大に腕を揮ふべくで俺も俊才が續出するので大に安心しちよつるのぢや。それから喃……』

彼れから喃……と喋舌るは／＼、油紙に火を點した如に……

……が廣瀬大尉は、

『ハ……、ハイ……、左様であります』

と、受ける丈けで、何に一つ口から出す事が叶ひません。稍々暫くの後に一寸話柄が斷れましたから、

『閣下、本日小官がお伺ひいたしましたは、實は……』

と、財部母子から依頼の趣を申しますと、未だ其の話の半にも達
しません中に閣下は、

山「黙りなはれ。軍人といふものはそんな女子の世話を焼くもので
はムはらぬ。俺は廣瀬大尉はま少し偉らい人物と思つたら大に違
つちよる。ハア用事はない、歸りなはれ起ちなはれ」

廣「ハッ」

大尉は椅子を離れて、直立不動の姿勢を取ります。

山「戻りなはれッ」

廣「ハッ」

答へは答へたもの、此の儘歸りましては、信義を完ういたす譯に
は参りません。さりとて何んといふて語を再び續けませうか、
大尉の顔は烈火の如くに赤く、そして額を流るゝ脂汗は玉となり
まして……。が尙直立して不動の姿勢を執つて居ります。
けれど、如何して宜からうと、其の胸の苦痛は如何ばかりでムい
ませう。

其の折柄、此の應接間へ裳の絹摺れの音もザハ〜と入り來られ
ましたは、これぞ大臣閣下の夫人でムいます。

夫「貴方が廣瀬様で在らつしやいますか、サア何うぞ椅子に……」

廣「ハッ」

夫「閣下、貴方はマア先方の椅子へ御移り下さいませ。妾は失禮ながら扉の外でお話を伺ひましたから……。嬢の話は矢張り女の方がよろしうムいます。何うぞ暫くお控へ下さい」と、閣下を彼方の椅子に押し移されまして令夫人は、

夫「廣瀬様、貴方のお言葉は御尤でムいます。財部様に對してお友達達の誼を能くお盡しでムいます。が廣瀬様實は嬢も立派な財部様へ嫁入り致すとて喜んで居りますのに、今破談といふことを聞かしましては定めし残念でムいませう。と申して貴方も信義をお守り

の爲に此處へ……。ア、嬢は不憫でムいます。何故に大臣大將の家に生れましたのでせう、でムいせんければ財部家へ御嫁入りの出来ますものを……。能く解りました廣瀬様、宜しうムいます嬢を勘當いたしませう。嬢を由本家から追逐致しませう。左様いたしますれば大臣大將の娘ではムいせん。廣瀬様軍人と申すものは強い許りでは……。涙も血も……」

令夫人の聲は涙に曇り消へます。

耳そばだて、謹聴いたして居りました大尉は、急に此の言葉を聞いて、

廣「令夫人様、能う廣瀬の胸に了解いたしました。何うか更めて此の廣瀬が御令嬢を頂戴致し、月下雪人となつて財部と夫婦にいたしませう」

夫「オ、左様願はれますか、それは實に嬉しうムいます」
そこで芽出度く、話は納まります。

只今の財部中將が令夫人は、即ち山本權兵衛大將の令嬢でムいます。

偕て斯様に信義を重じました廣瀬大尉は、また君に對して忠節を盡されました。また武勇をも奮はれました。

實に左様でムいませう。旅順港の海底に藻屑とは成られましたか
軍神として永く世界の戦史を飾られます。

東京萬世橋際に、我が部下杉野兵曹長と共に其の殊勳を末代迄も輝かす記念の銅像は、例令如何に苔蒸すとも、軍神廣瀬中佐の芳名は千古に轟くことでムいませう。

鐵火の拷問

(天野屋利兵衛)

亡君の復仇を企てました大石内藏助良雄は、豫て別懇にいたして居ります大阪の商人天野屋利兵衛に、夜討ち道具の數々を注文いたしました。

これを引受けました利兵衛は、其の筋の眼を忍むで首尾よく拵へ上げますと、程なく天下の法律を破つて、兇器を拵へたといふ罪で大阪北の奉行所松野河内守の許へと引き上げられます。

愈々けふは裁判とて、白洲の正面には松野河内守が嚴然として控

へられ、其の左右には吟味役を始め多勢の役人共が、星の如くに居並んで居ります。

先づ吟味役は、聲を張り上げまして、

吟「これ利兵衛、其方は天下制度の兇器を拵へたに相違あるまい」

利「ハイ仰せの通り相違ムりませぬ。如何にも御制度の兇器を拵へました」

吟「ウム、流石は一家の主人ともいふべき利兵衛、よく白状いたしました。して其の兇器は誰れに頼まれて拵へたか、又何れへ藏し置くか、真直ぐに白状せい」

利「先日來其の事に就きましては、度々の御下調べもムいしましたが御答へ致すことは出来ませぬ。唯々兇器を拵へたには相違は無之も、決して御膝下を騒がせ申す様な企では……」

吟「黙れツ利兵衛、其方は何んと申しても白状せんか、白状いたさんか、お上には必ず白状いたさしむる方法があるぞ」

利「なんと申されましたも、この事ばかりは申上げ兼ねます」

吟「ナ、なんと……。其れツ拷問に掛けい」

下「ハ、ア」

下役は、直に拷問の仕度に取り掛らうといたしますを、

松「痛み吟味暫く待てツ」

と、奉行河内守が止められました、言葉も柔かく、

松「これ利兵衛、其の方は由緒あるもの、末孫であるといふ。此の

奉行河内守にも慈悲はあるぞ、情はあるぞ。けふは潔よく白状致

し呉れ」

奉行の花も實もある言の葉に、利兵衛は流る、涙を、其の身は束

縛の悲しさ、漸く肩にて拭ひながら、

利「お情けのおん言の葉は有り難く存じまするが、何卒此の儀計り

は、再び御尋ね無之様お願い奉る」

松「なにッ、何んと……、此の奉行が斯く迄申すにも白状せんか愈
愈白状せん其の上は、拷問に掛けるより外はない」

利「ハイ何ういたしまして、決して申上げられません」

利兵衛は、確かと答へをいたしたのでムいます。

松「エイッ、憎つき其の一言……。これッ拷問に掛けい」

こんどは奉行からの命令でムいますから、下役は起つて直に其の
仕度にと取り掛ります。

其の拷問は世にいふ算盤責めと申して、小砂利の上に座らせま
た利兵衛の膝の上には、大きな石を一枚二枚と積み重ね、

ト「未だ白状せぬか」

と、段々に其の數を増すのでムいます。

下「白状せい、苦しければ白状せい」

日毎く種々と手を代へ品を變へての拷問のために、今や利兵
衛は糸の如くに瘦せおとろへまして、皮と骨ばかりの如な身體に斯
く幾枚となく大石を載せられますから、骨も挫け肉は千裂る計りの
苦しみてムいます。唯々齒を噛ひ締め眼を閉ちまして、我慢をいた
して居ります。

其の残酷の有様は、恰度地獄の責めの様でムいました。

が、どういたしましてでも利兵衛は白状いたしません。其の中に疲れ苦んで氣絶をいたしますから、牢内へと下げて氣附け薬を與へるして又々引き出し調べるのでムいます。

松「利兵衛面を擧げい」

利「ハ、ツ」

利兵衛は漸く面を上げまして、そして奉行の顔を見守ります。

松「利兵衛、其方は頃日來の拷問に遇ふても苦しうはないか、何うしても白状せんか」

利「度々申し上げますも諄々しうムいまするが、兇器は正に拵へま

したには相違ムいませねども、其他のことは何ういたしましても申上げ兼ねます」

松「ナ、何んといふても白状せんか」

利「ハイ」

松「愈々何うしても白状せんといふに於ては、奉行には取り調べる方法がある。必ず白状いたさせる方法もあるぞ」

利「それは如何様なりとも……」

松「エ、ツ、致し方ない。これッ小悴を是れへ……」

奉行の言葉に下役人は、連れて参りましたのは利兵衛の二子芳松

でムいます。

利兵衛が奉行所へ引き上げられますと同時に、母は里方へ歸され
芳松は町内預けとなり、父にも母にも遇へませんで、

芳「お父さんに〜……」

と、毎日泣き悲しんで居りました。

今奉行所で父の顔を見ますると、

芳「アレツお父さん」

と、繩目に掛つて居ります利兵衛に縋り付き、

芳「アレツお父さん、坊は遇ひたうて〜……、お父さんは何故こ

んなところに居る喃。坊と一所にお家へ歸りませう」

焼野の雉子、夜の鶴と申しまして、人として誰れでも我が兒を愛

さぬものはムいません。同じことの利兵衛は、今我が身が束縛の體

でムいますことも打ち忘れて、

利「オ、芳松、無事で在つたか」

此の様を眺められました奉行河内守は、

松「これッ利兵衛、其方は我が兒を可愛う思はぬか」

利「ハイ、我が兒の可愛いさは誰れでも……」

松「奉行は格別の情を以て、今悴芳松に遇はしてやるのぢや。何う

ちや眞直に白状して呉れんか」

利「ハイ、度々の有り難い御言葉は嬉しく存じますが、何卒其の儀ばかりは平にお許し下され」

松「此の奉行が何んと申しても……」

利「ハイ、何うありまして申上げ兼ねます」

松「可しッ、其れなれば、當方にも相當の心得が有るぞ。決して如何様のことありとも此の奉行を恨むな」

利「ハイ……」

松「それッ要意の品を、これへ……」

下「ハ、ハ、ハ、ッ」

下役の三四人は、直に持ち参りましたのは、それは何んでムいませう。

疊一枚計りの物に、山の如に熱火を入れて、其の上には鐵の棒が

四五本横たへてムいます。

炎々と燃へ上ります熱火のために、横たへてムいます鐵の棒は眞

紅に焰が起つて居ります。

松「利兵衛、如何あつても白状せんか、白状せんならば悴を火責に致すぞ」

何んと責め立てられましても、利兵衛は白状いたす譯には参りません。斯くくでムいますと白状いたしますれば、自分が誓ひました信義を破らねばなりません。

如何なる苦しい境遇に會ふても、どうして信義の二字を忘れることが出来ませうか、

利「白状はいたし兼ねます」

不相變の言葉でムいますから奉行も、早や如何んともいたし方がムいませぬ。

松「其れツ、掛けい」

下役は突然芳松を引き抱へます。

芳「アレ……」

と芳松は悲鳴を挙げますも關はずに、下役人は鐵火の上へと連れ参ります。

芳松は鐵火に近く、其の身體をかざられれます。

松「何うちや利兵衛、白状せんか……」

利「……」

利兵衛は、地獄の責めよりも烈しい我が兒の拷問を、眼の前にながめましても、何に一つ申しませぬ。

悴芳松は、焔に包まれんといたしますから、

芳「熱いく、許して……」

早や泣き聲も出し兼ねて叫びます。

松「何うちや利兵衛」

利「……」

尙一言も申しません。

松「愈々白状せんか、エ、イツ致し方ない。芳松を火に近く」

下「ハッ……」

下役人は遠慮もなく芳松を、熱火に紅となつて居ります鐵棒の上

に近く、

熱さ苦しさに堪へ兼ねました悴芳松は、

芳「許して……」

と、其の身を藻掻きます。

此方の利兵衛は、齒を堅く喰ひ縛つて尙一言も發しません。

松「何うちや利兵衛」

奉行の再三の言葉に利兵衛は、始めて口を開き、

利「天野屋利兵衛は男でム……。白状せぬと申上げました以上は

例令眼前悴が焼き殺されましても白状いたしません」

嚴然と言ひ放つたのでムいます。

これを聞かれた流石の名奉行河内守も、心の中では偉らい奴ぢやと思はれましたが、お役目柄いかん共致し方がムいませんから、心を鬼にいたされて、

松「芳松を火に乗せい」

下「ハ、ア」

下役人は、芳松を愈々熱した鐵の棒の上に乗せようといたしまするの其の刹那。

下「只今利兵衛妻お末なるもの、御奉行様へ申し上げたき儀有之と

て罷り起しましたるが、如何取り計ひませうや」

松「オ、それは幸ひ、直ぐこれへ連れ参れ」

利兵衛の妻お末は下役人に連れられて、白洲へと参ります。

末「マア良人……」

と、利兵衛の傍に走り寄ります。

芳「お母ちゃん、坊はこれ……」

芳松の聲に驚きましたお末は、

末「どうして坊や迄が……」

芳松はお末が参りました計りに、熱火の拷問を免れましたのでム

います。

松「利兵衛女房お末とは其の方か……、奉行に申し上げたい儀とは何事か申立てい」

末「ハイ餘の儀にもムいませぬが、夫の利兵衛の件に就きましていムいます」

松「ウーム、夫利兵衛の身の上にてか、早々申立てい」

末「ハイ實は夫利兵衛事、永らく淺野内匠頭様御最負に預り居りましせも、先般松の廊下の御及傷より御切腹、其上御家は御斷絶となりまして、殘る赤穂の面々は城を枕に討死といふ事になりました」

70 就きましては日頃御最負を蒙りました利兵衛も、共に城を枕に討死致すも内匠頭様への御忠義と、直に赤穂へと参りました」
松「成る程」

末「すると程なく戻つて参りまして、赤穂のお城はことなく明け渡しになり。利兵衛の生命も先づ無事ちやと、喜ばして呉れましたのも寸時の間、其れからと申すものは祇園島原の遊女買ひに身を窶つし、家を外に留守勝ちの放蕩三昧でムいます」

松「ウーム」

末「して初めは妾も唯々女にと嫉妬をいたしましたでしたが、これには深

い仔細のムいますので、天にも地にも一人の妻でムいます私迄も
追ひ出しまして、そして天下御制度の兇器を造りました」

松「その兇器は誰れに頼れたか知つて居らう。それさへ判れば利兵
衛も芳松も許しやるのぢや」

末「ハイ左様でムいますか、それは赤穂の家臣が御主の仇討つため
に、其の義士とか申されます大石……」

松「黙れッお末……、其方は發狂いたして居る」

利「中途から差出でがましようはムいますが、これなるお末ことは先
般早や離縁いたしたるものにて、この利兵衛の女房には無之また

御奉行様の御察の通り狂氣いたして居ります」

松「ウム左様ぢやらう。狂氣いたして居るに違ひない」

この河内守が、お末を狂人と申されましたのは深い仔細がムいま
すのです。

が、それを悟りませんお末は、

末「イ、エ、決して私は狂ひはいたして居りません。實は夫利兵衛

が……」

松「黙れッ、其方如き狂人を取調べるの要ない」

末「決して發狂は……」

「エイツ、狂人を表へ出せい」

下役人はお末を引つ捉へて、

「イエ〜」

と、應じませんを無理にと押し出します。

すると同時に、奉行は利兵衛にと向はれて、

「その方望み通り、はや取調べはいたさん。御牢内に下り保養充

分に致せ」

「利ハツ、有り難き仕合せに存じます」

そこで利兵衛は、御牢内へと下げられますと、それからと申すも

のは何事もなく、其の日〜を牢内で暮します。

すると元祿十五年も経つて、十六年の初春になりますと、利兵衛

と同じ牢内に繋がられました一人の罪人がムいました。

其の者の話で、去年極月十四日の夜、大石良雄殿を始め四十七士

の面々が、首尾よく御亡君の仇討ちをいたしたといふことを聞きま

した利兵衛は、

「利御奉行様へ申上げたきこと有之……」

と申出でまして、始めて大石良雄に頼られましたて兇器を造つたと

いふことを、白状いたしたのでムいます。

そこで名奉行松野河内守も、天野屋利兵衛が其の身は商人でありながら、武士も及ばぬ精神で、信義の二字のために我が身は勿論のこと、其の悴迄も鐵火の拷問を受けましても、決して白状いたしませぬことを心中大に賞せられまして、

『場所拂ひ、立ち退きせい』

と、至つて軽い罪に問はれたのでムいます。

それと申しますのも利兵衛が、信義の二字を堅く守つたがためでムいませう。

能く芝居で演じます天野屋儀兵衛は、即ち此の利兵衛のことで多少脚色へいたしたのでムいます。

暗夜の黑影

(福村一等卒)

このお話は、過ぎし日露役の時でムいましたが、第九師團の一部でムいます歩兵第三十六聯隊は、旅順二龍山砲臺の斜堤を守ることとなりました。

時は十月の三十日、朝來から寒氣が非常に甚だしく、そして夜に入りましてからは尙一層でムいます。

第六中隊附でムいます一等卒福村與八は、所謂生の乾魚に半熟飯の夕餐を済ましますと、某所に歩哨を命せられ、寒き風に身體を吹

かれつゝムいました。

其の中に時刻は段々と進んで参り九時も過ぎ、早や十時に垂んといたします頃、ズドン〜と銃聲がいたします。

『失敗つたッ』

と、福村一等卒は叫びながら、其の手にいたして居りました銃を大地へバツタリと、

何處からか飛び来りました銃丸のために、その兩肘を貫通されたのでムいます。

勇敢なる福村一等卒は、毫も怖るゝの色も無く、直に用意の三角

巾で繃帯なし、銃を執り上げんといたしましたが、銃丸貫通のために、其れをいたすことが出来ませんでした。

止むなく銃を執らないで、四邊の風そよぐ音にまでも意を注ぎつ、我が任務なる監視哨を完ふいたして居りますと、烏羽玉の黒白もわかぬ暗黒の中に、朦朧といたした黒影が現はれます。

しかも其の黒影は、一歩々々と近寄り参りましたから、

『止めッ』

と歩哨福村は叫びます。

『俺しぢや、山田少尉ぢや』

福「オ、山田少尉殿でありますか」

黑影なりし山田少尉は、歩哨福村一等卒の眼前へと……。

すると福村一等卒は、直立不動の姿勢を取つて頭を下げて居る計りで、銃を手にしたして居りませんから、山田少尉は之れを詰問せられます。

山「これ福村ツ、銃は何うしたのぢや。歩哨が銃を手になんて、其の任務が果せるか」

福「ハイ、銃を執ることが出来ません」

山「何にツ、銃を執ることが出来んと……」

福「ハイ先刻何れからかやつて来た銃丸のために、此の通り兩肘を貫通れまして、自由が叶ひません」

山「銃丸が兩肘を……」

福「ハイ」

山田少尉は、福村一等卒の腕を見ますると、成る程白き布を繙帯いたされて、そして紅の血汐は滲み居ります。

山「オ、痛むぢやらう。何故早く歸つて交代せんのか」

福「ハイ痛みます。が歩哨といふものは猥りに信地を離れてはならんと、平素少尉殿からの御教訓も忝いままです。また兩肘が用をなさ

んでも、耳と眼は無事でありますから、監視哨の任務は果し得ます』

山『ウーム』

福『でありますに、何にも少し計りの痛みに恐れて、交代して頂くの必要がありません。それでは平素少尉殿からの御教訓に背きません。それでは信義といふ二字に違ひます』

山『オ、汝は、能う俺しの教訓を守る。上官の命令は即ち 陛下の命令である』

福『ハイ……、例令私は倒れましても、此の地を離るゝ心は毫もあ

りません。敵と刃を交へて倒れんでも、歩哨に立つて倒れても矢

張り 陛下の御爲めと思ひます』

山『左様ぢや、如何にも左様ぢや』

山田少尉は福村一等卒の負傷に痛める兩肘を、我が手に支へて押し頂き、そして其の眼には感涙を漂はせます。

山『福村ツ、今二三十分計り我慢して居れ。俺しは巡察を終へて直ぐに交代兵を遣すから』

福『イヤそれには及びません。交代時間の来る迄御心配には及びません』

山否直ぐに遣はずぞ。實に汝等如き信義を守りそして忠節を盡す部下があればこそ、我が歩兵三十六聯隊の名譽も實に偉大なるものぢや。實に汝は模範兵である。早速隊長殿に報告する』

福「ハ、ア。私は唯々少尉殿の御教訓を守ります丈けでありまして何にも模範兵といはるゝ程の勳功もありません』

山田少尉は其の言葉に至極感賞いたされ、福村一等卒は忽ちに上等兵に抜擢いたされたといふ話でムいます。

これも信義を守り全うした其の爲めでムいますことは、此に喋々喃々するまでもムいません。

改悔の屠腹

(村上喜劍)

前の天野屋利兵衛のお話の中にも、一寸述べましたが、亡君淺野内匠頭長矩公の御無念を晴さんがために、赤穂浪士四十餘名の人々は、實に千辛萬苦を重ねられましたのでムいます。

中にも頭領大石内藏助良雄は、又た特に格外でムいまして、敵を欺くがために、母上に愛憎づかしを申し、また可愛い妻子までも放逐いたしましたして、態と遊惰に身を寔して居ります。

けふも四條驛の人々の往來も繁しい其の中を、原惣右衛門元辰と

神崎與五郎則休の兩人を供に連れ、そして多くの藝妓、幫間に取巻かれ、一步は高く一步は低くと、此方にぶらり彼方にぶらりと千鳥尾でやつて参ります。

すると、牡丹餅紋附黒木綿に白小倉の袴を胸高に、朱鞆の大小を挟むだ一人の侍が、

喜「待つた。待たれよ大石氏……」

と、往來の真中に突立ちまして言ひます。

内「誰方様……」

喜「オ、我れは、薩州島津の家來村上喜劍と申すもの、山科の浪宅

へ訪問れしこと既に三度、何時参つても留守でゐる、不在でゐる

と……」

内「それは恐縮……。とんと外出勝の内藏助、何んぞ御用でゐるか」

喜「されば大石氏。亡君御無念晴らしは何時に相成るや、其れが聞きたい。憚りながら此の村上喜劍助勢がいたしたい」

内「オ、何んと仰る村上先生。此處は往來……」

喜「成る程、立つて話もこりやなるまい。然らば御貴殿の御宿まで……」

そこで連れられて参りますのが、京都で有名な一力茶屋の奥座敷でムいます。

大石が眼配せいたしますと、原と神崎の兩人は其の座を起ち外します。

喜「サア、御亡君御無念晴しは……。サアお明し下され」

内「ハ、ア、何にが何にやらとんと内藏助には判らぬ……。こりや女共何にを愚圖々々致して居るか、村上先生に御酒差上げんか」
女「どうぞ先生、一つ召し上れ」

喜「否や飲まん、薩摩の武士は汚しい女は嫌いぢや。これへ寄るな

觸るな」

と、大聲を發して叱り附けますから、藝妓舞子は皆怖れ驚いて逃げ去ります。

喜「サア他人は居らぬ。心中お明し下され」

内「ア、村上先生、未だお年が若い。成る程一時は憎つくい吉良上野奴と思ふて見たもの、段々と考へて見れば吉良を恨は逆恨みでムる。汝に出で、汝に歸るの例令で、恨は却て内匠頭に在り」
喜「とは、また何に故に……」

内「さればでムる。殿中に於て鯉口三寸寛げたるものあれば、如何

に堂々たる名家なりとも、其家斷絶身は切腹と御辨へも有り乍ら
 場所を憚らぬお振舞ひにて松の廊下の刃傷を。御家は斷絶主公に
 は御切腹。我々一同は路頭に迷ふも、これ即ち皆な主公の成され
 た罪、仇討などは、往昔の野暮なる武士のいふ言葉、斯く迄太
 夫に惚れられて廊の酒の身に浸みた内蔵助は、如何で我が身を思
 ひませすには……。仇討ちとは夢にも考へません』

喜「黙れッ大石良雄。五萬三千石のお家盛んの頃、何にを勤めて其
 方は居つた』

内「憚りながら城代家老……』

喜「斯くも重き役にありながら、太夫とやらに浮身を窶して……サ
 ア太夫が大切か、御主が大事か』

問ひ詰めますと内蔵介は、

内「マアお叱言は……。遊女が酌いたす廊の酒は格別でムる。貴殿
 も一つ召し上れ』

喜「黙れ大石ッ、我れは遠く先祖を尋ねれば……』

内「イヤ〜、粹も不粹も通ふ色里で、御先祖の御自慢は……』

喜「イヤア何にを言ふても張合のないこと……。イザ薩摩武士の鐵
 拳を喰へ』

と、固めた榮螺の如な拳で、内藏助を擲つて掛ります。

内「これは亂暴々々。お手は痛みはいたさぬか」

喜「エツ犬侍ツ、これを喰へ」

小皿に盛つてゐいました蛸肴を足に挟んで、内藏助の面前へと突き出します。

内「オ、これは何よりの好物……」

と喰ひました。

喜「エイツ、魂何れに抜けたかこりや内藏助……。汝等如き言葉交すも汚らしい」

含みました青啖を、内藏助の顔へと吐き附けました喜劍は、怒り憤り壘を蹴つて出て行きます。

斯の如くに恥辱を受けましても、何等言葉も返さず無論一つ手出しもいたしません内藏助の心中は、實に如何でゐませう。

偕てお話は變りまして喜劍は、それから東海道五十三次の宿々をまた奥州邊りまでも旅いたし、道々で忠臣孝子節婦の事蹟を能く調べ、國への土産話しと喜びながら、またも花の江戸へと立ち戻りまして、それから東海道に未だ見残しもあるからと、旅の仕度もそこそこに出發いたして高輪までやつて参ります。

現今の高輪とは違ひまして其の當時は、片側が掛茶屋でムいまし
た。

房總二州の海をひと眼にいたされまます見晴しのよい所に、喜劍は
腰打ち掛け、好景を眺めて居ります。

すると、そこへドカ／＼と這入つて参りましたは、同じ揃衣を著
ました職人體の若い者が三十人計り、

若「オ、嬢ツ、預けた物を貰ひに來たせえ」
婆「オヤ／＼大層お早いお戻りで……」

これを物珍しげに眺めました喜劍は、

喜「ア、こりや町人」

若「何にツ、何にが町人でい。大きなことを吐すねえ」

喜「町人といはれて、腹が立つなら許して呉れ。見受くるところ揃

ひの衣裳……。けふは何處の祭禮なるか」

若「ヤイ何にを言つて居やがるんでえ。この田舎武士奴、俺達は揃
ひの衣物を著たつて、祭禮ぢやねえのだ。オ、墓参りに行つたん

だせえ」

喜「何に墓参か」

若「妙なことを言ふない。何にが墓参でえ」

喜「慕参とは慕参りといふことぢや」

若「ウム、符號で言ふなよ」

喜「ところ變れば品が變るといふが、江戸といふところは慕参りに揃ひの衣物を着る處であるか」

若「何にを言ひやがるんでえ。江戸ッ兒達はペラボウ奴、慕参りに揃ひの衣物を着るとは相場が極つて居ねえのだ。俺達は揃ひの衣物で慕参りを仕なくてはならねえことがあつて、揃ひの衣物を着たんだが、悪いけえ」

喜「否や悪いとは言はぬ。して何人の慕参りを……」

若「オ、俺達は浅野の浪士の……」

喜「浅野浪士が、何といたした」

若「知らねえのか、驚いたなア。それ去年の暮の十四日に、松坂町吉良の邸へ乗込んで、上野介の首をちよん切つてよ、高輪の泉岳寺に葬つてある浅野様のお墓にお眼に掛けてなア。して皆んなはその場で切腹したのだ。で、皆んなも矢張泉岳寺に葬式したんだよ。それで俺達は揃ひの衣物でよ、ど偉れえ浅野の浪士に景氣を附けてやれと慕参りをしたんでえ」

それを聞きました村上喜劍は、其の身が恰度奥州を旅あるき中の

出来事でムいますから、大に驚き吃驚いたし、

喜「ウム、して其の中に大石内藏助良雄ありや」

若「何にツ、在るも無えもあつたもんぢや無え、此のお方が第一の偉れえのだ。親方だせえ」

喜「儲ては……」

若「いやに感心しやがつたなア」

喜「剣が感心いたすのも、無理はムいません。」

若「オ、左様々々、京都の四條畷で大石様に、遇つたといふ侍が主の仇討ち何時なるか、及ばす乍ら助勢がいたしたいのなんのつて

生意氣なことを吐かしやがつて、其の上大石様に銷着を足で喰はせ、まだく、啖をひつかけたり、撲つたといふが、其の侍の野郎の腕は、今頃はきつと曲つて居やがるだらう。なんでも村上喜剣とかいふ田舎武士だとよ」

喜「剣は眼を閉ぢまして、思ひに深く沈みます。」

若「オ、早く歸えらねえとならねえ。アバヨ」

若「い者は立ち去ります。」

昔から燕雀何んぞ大鵬の志を知らんやと申しますが、實に斯くの如くでムいます。」

喜「こりや婆、泉岳寺と申すは何れの方なるや」

婆「ハイこれを少々お出で遊ばして、右の小坂を突き當りますとお寺がムいます」

そこで喜劍は、茶屋の婆に教へられた通りに、泉岳寺へと訪れますと、四十七士の墓が、なる程並んで居ります。

中に一と際高く目立ちますのが、即ち大石内藏助良雄の墓でムいます。其の内藏助の墓前に喜劍は座しまして両手を突いて頭を下げ我が身の愚かより内藏助を罵りましたことを改悔いたします。

喜「犬侍」と罵りし喜劍の愚かは、實に赤面汗顔の至極でムる。何

卒大石氏幾重にもお詫を仕る」

恰度生ける人に物言ふごとくに、厚く謝罪いたしまして、我が信義に缺げました件々を改悔いたします。

懺悔の情をありくと顔に現はしました喜劍は、故郷を出發いたしますの際に、父が記念に下さつた關の孫六の名刀の鞘を拂ふて遂に自殺いたしました。

其の死に際の見事でムいましたには、後でこれを發見いたしました泉岳寺の住持玉堂も、いたく感心いたされた想でムいます。

喜劍が一旦口から出した言葉は、如何でムいます。

信義のために、斯くも村上喜劍は、改倭の屠腹をいたしましたから、後の世までも四十七義士と共に、其の名を謳はれるのでいます。

記念の軍刀

(馬丁吉松秀作)

佐賀縣基肆郡田代村に、牧馬を業といたして居ります吉松秀作といふ男がいました。

朝鮮に於ける東學黨が原因で、日清兩國は此に戦端を開くこととなり、秀作は、

秀『國家に盡すの秋は來れり』

と、直に廣島へと参りまして菊池軍醫正に懇願いたし、第五師團附きの軍夫となつたのでいます。

馬丁吉松秀作

すると、幸ひに木澤一等軍醫に見出されて、軍醫が馬側に従ふことを得ました。即ち馬丁とはなつたのでムいます。

愈々明治二十七年八月十六日に、主人木澤軍醫に従ふて戦地に出發いたしました。

馬丁秀作は未だ乗船といふことを知らない人間ですから、白波怒濤に揺られ船は非常に活動いたします故、自分は眩暈が烈しく室の一隅に打俯せ勝ちでムいます。

甲「オイ秀作、軍醫殿が非常に船暈でお苦しみた」
仲間の一馬丁の知らせで、

秀「オ、左様か、御主人も矢張り俺と同じく……」

直に介抱に馳せ附けんといはしたましたが、船の動搖は益々烈しく自分が眩暈は愈々加はりまして、歩を運ぶさへ困難でムいました。主人に忠實なる秀作は、柱に倚り或は匍ひつ主人の室へと参り、

秀「旦那様如何でムいます。早くからお側に伺ふて居ります筈でムいましたが、秀作も眩暈のために遂ひ失禮いたしました」

船暈のために眼を閉ぢうつゝの軍醫は、秀作が親切なる一言を聞かれ、眼を僅に開ひて、

木「これ秀作、能う来て呉れた。俺れはよいから自分は充分に休養

せい』

馬丁も主人も共に斯如に……。臣は主を思ひ、主は臣をいつくしみまへす。

其の中に乗船は仁川へと投錨まして。目的地へと出發いたしましたしつ、恰度龍山を北進いたします時に、秀作は痲病に罹り體力は衰へて、歩行さへも甚だ困難でございましたから、

木「秀作、お前は龍山に留まつて、病氣を癒してから後で来るが可い。遠慮なく充分に休養すれ」
軍醫は親切に仰いますと、馬丁秀作は首を左右に振りつ、

秀「此主人様の御言葉は有難くお禮いたします。が私はお側をお離れいたすことは嫌でムいす。何うか斃れます迄は……」
實に其の身は斃るゝに非れば、主の馬側を離れずと申して、苦痛を忍びくゝて従ひ参りますと、幸ひにも四五日いたしますと全く快癒いたしました。と今度は主人の木澤軍醫が、また同様に痲病に罹られました。これは些々たることで、別に前進にも差支へはムいませんで、唯々主従二人は列より後れ馬足を弛めつ参られます。
往く行く主従は、種々の話を交へました其の末に、
木「秀作よ、貴様が若しも死んだならば、俺は必ず遺骨を故郷に送

り呉れん、俺若し死なば汝は、俺が骨を携へて歸り呉れ』
と、斯如な約束が結ばれます。

九月八日に瑞典に達しますと、軍醫の病勢は急に革まり食慾は減じ、身體は非常に衰弱いたしました。翌日は無理に出發いたし鳳山へ參り、厠に入らんといたされた軍醫は、遂に卒倒いたされました。

秀作は大に驚き直に抱き負ふて、床上に安置いたしました。發熱甚だしく遂に四十度に昇ります。そして診斷の結果は痢病ではございませんで、腸室扶斯でふいましたから看護手が、

看「傳染病であるから、病床に従ふことは成らん」

軍醫が秀作の枕頭に侍することを禁じます。が如何でこれを秀作は唯々と肯き入れませうや、

秀「自分は死を以て、主人の看護を望みます」

看護手の遮りますを無理に、傳染といふ恐しいことも怖れずに主人の枕頭を離れません。

秀作は斯如に熱心に、軍醫の看護に勉めますが、病勢は愈々革まり參りまして、物語らんといたしても其の口は物言ふことが叶ひません。そこで秀作はいろは五十音を大書いたし、軍醫の手を扶けて

其の言ひ遺さんとする所を指示させます。

薬石も其の効なく、秀作の熱心なる看護も其の甲斐なく、翌十二日に木澤軍醫は、遂に彼の世の人となつたので、

ために秀作の悲哀は如何計りで、倒いたしましたといふ位で、其の主忠節であつたといふことが知悉いたされます。

止むなく計を兵站部に報告いたし、又自ら屍體を火葬の上、十三日其遺骨を拾ふて、歸國の件を兵站部に届け出でました。すると部員の申しまするには、

部「汝は元と第五師團の軍夫なれば、軍醫の乗馬を當部に交附なし、汝は今より軍隊と共に前進すべし」

と、然し秀作は何んで此れを承知いたしませう。一旦主人と誓つた言葉が、信義を破ることは叶ひません。

秀「馬は勿論交附いたしますが、私は主人の遺言を傳ふべきの義務が、あります。この義務を終へませねば軍に従ひ得ません」

部「左様か、然らば其の遺言を予に報告すれ」

秀「我が主人が死に臨み、我れを信じて遺言を托されたので、

す。何うしてこれを他人に洩らすことが叶ひませうか」
遂に歸國の許可を得て、自ら軍醫の遺骨と記念でムいます軍刀と
を脊負ひ、他の荷物は韓人に擔はしめて、鳳山を出發いたして仁川
へと向ひます。

其の途中で、貪婪飽くことを知らない韓人は、屢々酒錢を強請い
たします。ために秀作が僅少の旅費は缺乏を告げ、遂に其の身に纏
ふ外套までも賣り拂ふて、漸く仁川へと参りました。

仁川へ辛じて到着いたしました秀作は、早速軍醫と竹馬の友でム
いました飯黒少佐を訪れて、軍醫の病死に對する件々を物語ります

から、

飯「オ、秀作、それは能ういたして呉れた。少佐は軍醫に代つて汝
に謹謝する」

秀「どういたしましたして、臣たるものが主のために盡すのでムいます
幸に此の秀作は生き延びまして、軍醫殿の御遺言を傳へること
が出来ました」

飯「如何にも感心なことぢや」

少佐はいたく馬丁秀作をいたはり、其の夜は心盡しの御馳走にと
態々雞を屠つて與へますと、

秀「折角の御馳走は有り難うございますが、私は今御主人を亡ひ精進の身でムいますから、御辭退申上げます」

とて、遂々一つ切れも箸にいたしませんでした。

少佐は益々秀作の心根を感じ、恰度居合はせました新聞記者連に

其の身は馬丁でありながらも、斯様々々な忠實な者ちやと物語られ

ましたから、新聞記者連は直に筆を揃へて、忠實なる馬丁と題して

秀作の佳話を傳へます。

其の佳話は、ために廣く人の眼に觸れたのでムいます。

偕て仁川を出發いたしました秀作は、海上恙なく九月二十二日

宇品へと到着いたし、直に菊地軍醫正の許を訪れ、涙を流して木澤軍醫が病死の顛末を語ります。

菊「オ、それは……。流石は俺しが木澤に周旋してやつた甲斐

がある。定めしこれ聞いたならば遺族も喜ぶであらう。早く木

澤軍醫の遺族に、其の遺言を告げてやれ」

秀「ハイ早速出發いたします」

海上の疲労も打ち忘れ秀作は、直に其の日の午後六時廣島驛を出

發いたし大阪へと參らうといたします。

廣島停車場を今や離れんといたす上り列車は、黒烟を天に漲らせ

て、そして其の時刻の到るを待つて居ります。

木澤軍醫の遺骨と軍刀を脊負ふた秀作は、列車内の一客とはなりません。

其の中に發車の時刻が迫りましたと見へ、驛長が切りに時計に眼を注いで居りますと、改札口から急ぎ／＼と、今や出發いたさんとする列車を、其の一室毎に眼を注がれます一將校がムいます。

菊「秀作ツ……。秀作は何處ぢや……」

其の呼ばる聲に秀作は、不圖車窓に首を出しますと、

菊「オ、この菊池軍醫正が、態々見送つてやるのだ」

秀「エツ、有り難うムいます。定めし骨となられた木澤軍醫殿も御喜びでムいませう。軍醫正殿が御多忙中御見送り下さいましては……」

菊「否々秀作ツ、俺しは木澤を見送りに来たのでは無い。貴様を見送りに来たのぢや」

秀「エツ此の秀作を……」

菊「如何にも、吉松秀作を見送りに来たのぢや」

秀「では、態々此の馬丁の秀作を……」

菊「オ、左様ぢや、秀作をぢや……」

秀「軍醫正殿が馬丁を……」

菊「否々馬丁を軍醫正が見送るのでは無い。汝が忠實と信義を完うする。即ち汝の忠實と信義に對して、見送りに來てやつたのぢやぞ俺しは此の譽れある見送りを喜ぶのぢや」

一馬丁の出發を見送られるのでは無い。成る程秀作が信義に對してでんいませう。しかも公務多忙の軍醫正が態々斯くいたされますのは……。

時刻は參ります。汽車は轢り出します。

秀「軍醫正殿……」

菊「オ、秀作……」

廣島驛を離れました列車は、恙なく大阪梅田停車場にと豫定の時間かんに到着たうちやくいたします。

數多の降客と共に、今や秀作は改札口を出でますと、進み寄つた一人の婦人がムいます。

しかも其の一婦人は、未だ年若く、二十二三歳の美しさに引替へ其の縁みどりの如き黒髪は、惜し氣もなく根元よりブツリと。

婦「もし失禮ですが、貴人は吉松秀作様では……」

意外なところで意外な婦人に、我が姓名を言はれましたから秀作

は、唯々啞然だげんといたして、其そのの婦人ふじんの顔かほを穴あなのあく程ほど見守みまもります。

婦と「突然とつぜんに申上まをしあげて御驚おんおどろきでムいませう。妾わたくしは貴方あなたに一方ひとかたならぬい

お世話せわになりました木澤きざはの妻さいでムいます」

秀しゅう「エツ、軍醫殿ぐんいじんの御令夫人様ごれいふじんさまで……」

婦と「實じつは廣島ひろしまから菊池軍醫正殿きくちぐんいせいじんの電報でんぱうでムいまして、御出迎おでむかひいた

しました。サア俤くるまに召めして……、此所こゝではお話はなしも出来できませんか

ら兎とに角宅かくたくまで……」

秀しゅう「ハイ有り難ありがたうムいます。何なにういたしまして俤くるまへなど……、これ

は軍醫殿ぐんいじんの御遺骨ごいこつ……。此こゝは記念かたみの軍刀ぐんたう……。どうかこれをお持も

ち下さつて、御令夫人様ごれいふじんさまは俤くるまでお先さきへ……。手前てまへは後あとから徒歩たふ

で伺うかひます」

婦と「どうか左様さやう仰おつしやらずに、一所しよに俤くるまで……」

無理むりに勸すすめられて秀作ひでさくは、車上しゃじやうの人ひととなり主人しゆじんの遺骨いこつと記念かたみの軍

刀たうを捧さげ持もつて居をります。其そのの後に従したがふは令夫人れいふじんでムいます。

程ほどなく清水谷下しみずやくだなる軍醫ぐんいの宅たくにと、俤くるまは止とまります。

婦と「サア何卒いっせ此方こゝらへ」

令夫人れいふじんに案内あんないせられて一ひとと間まに通とほります。親戚しんせきの方々かたぐも多おほく集あつま

られて居をります。

先づ遺骨と記念の軍刀を、秀作は令夫人にとお渡しいたし、それから涙を拭ひながらに、臨終の有様を物語ります。

婦有り難うございました。貴方が側に居て下さつた計りに、遺骨も記念も、またその上に遺言迄も……。何んともお禮の申し述べようもありません』

令夫人は切りに感謝いたされます。

また親戚方のお方も同様に、

『種々と一と方ならない御世話様でした。お蔭で軍醫の家内も悲しみの中に喜びが見へまして……』

秀『どういたしまして、これは臣たる此の秀作が、主たる軍醫殿にお勤めいたす義務でムいます。反て御賞詞に預りましては恐縮でムいます』

と、秀作は何處までも自分が身を誇りません。

秀『御令夫人様、これは軍醫殿の出納簿でムいます。そして此に八十三圓二十六錢丈けムございますが、これはお使ひ残りで……』

懷中から紙幣、銀貨、銅貨を取り出して示します。

婦『マア主人の遺遺ひまで……』

秀『ハイ何うか帳面とお引合せを願ひます。何うぞ金子を御受取り

『下さい』

婦『イ、エ帳面は頂戴いたしませうが、金子などは思ひも寄らぬこととで……』

秀『どういたしまして、これは御主人様の金子でムいます。御臨終の際に、軍服のポケットにございましたから……』

これを聞きました一同は、最初から主に忠實に、そして主に誓ふた信義のために、千辛萬苦いたして遺言を傳へた計りでも感心いたして居りましたのに、尙々秀作は一毫の錢さへ自分の懐中に致さず、帳簿と共に差出しましたから、誰れしも、

甲『馬丁ともいふべき人柄に、似合はせない正直者だ』

乙『誠に感心なものぢや』

と、口を揃へて賞讃いたしました。

そこで御令夫人も、其の金錢を受取り、改めて一百圓の金子を加へて秀作に渡し、

婦『これは失禮ながら、貴方に差し上げるのではなく、貴方が信義といふ二文字のために盡された、其の感心なお心掛けに差し上げますから御收め下さい』
と、一百八十幾圓といふ大金を興へられて、其の信義を完うした

といふ點を感謝いたされました。

嗚呼其の身は、當時で申しますれば腕に一本の筋さへも附せぬ二等卒よりも、未だく遙かに身分の低い馬丁ではムいますのに、斯く信義を完ういたしたといふは、實に佳話として永く傳へ傳へなければならぬことと思ひます。

人格と修養

質素

赤切符の旅

(乃木大將)

(一)

難攻不落の鐵壁と、敵の恃みくましました旅順の堅城を陥落せしめ次いで奉天の大會戰に大捷利を得て、遂に媾話談判が成立いたして赫々たる名譽を双肩に荷負はれて、芽出度く凱旋いたされました陸

乃木大將

軍大將乃木希典閣下には、或る日のこと先祖の墓参を思ひ立たれました。

そこで平素から至つて質素な閣下は、身には木綿の粗服を纏はれて、書生の山本一人のみを引連れて、飯田町の停車場へと來たられたのでいます。

三等待合室の一隅に、腰打ち掛けられましたは、どういたしても陸軍大將伯爵閣下とは受取れません。

乃「山本ッ」

山「ハイ」

乃「乃公が斯うやつて腰打ち掛けて居る處は、お前の眼からは何んに見へるか、遠慮なう言ふて見い」

山「それは、何ういたしても閣下とは見受けられません」

乃「これ閣下と言はずに、單に主人と言へ。何者に見へる」

山「ハイ、孤兒院の事務員が孤兒を連れて地方へ行き、百姓の恵みでも受くる様に見へます」

乃「ウーム。孤兒院の事務員といふものは斯様か」

山「ハイ」

其の中に乗車券を賣り出す、閣下は自ら切符をお求めになる。白

乃木大將

切符ではムいけません、三等の赤切符でムいます。改札口で鉄を受け
そして三等列車にと乗られます。

汽笛一聲列車は飯田町を離れます。早や四谷も過ぎ新宿も通り越
します時に閣下は、

乃「何うちや山本、汽車は三等がお客が澤山で、徒然せんぢやらふ
三等に限る」

山「ハイ」

書生は三等では聊か不満でムいますが、如何んとも致し方ムいま
せんから、唯々首を……。

其の中に列車が國分寺驛に著きますと、五六人連れの若い者がド
ヤ〜と……。

甲「サア〜、これから甲府迄は長道中だ。澤山のトンネルを通ら
なくてはならねんで、皆んなが定めし退屈をするだらうから、俺
れが一つ戦争の話しても仕て聞かしてやらうか」

乙「それは何より結構だ。俺れは補充で引き上げられて廣島迄行く
と、ホラ彼れだ……」

丙「彼れだとは、何によ」

乙「彼れつていふことよ」

乃木大將

丙「彼れつて」

乙「彼れよ」

甲「媾和談判か」

乙「左様々々、其の媾和談判だ。俺れは遂々戦争に行けなかつたんで残念で堪まらねえ。どうしても其の彼れつていふことを……」

甲「ハ、ア、先づ此の連れの中で、實戦に臨むだのは俺れ計りだ。ア。一つ久し振りて聞かしてやらうか」

乙「時々嘘をいふからなア」

甲「嘘なんかいふものか、手前達は見て來ねいから知らねえのだよ」

恰度嘘の話の様だ

乙「前提は省略にして、早く話して呉んねえ」

甲「可しッ、愈々始めるぞ。抑も俺れが麻布の一聯隊に召集せられて、字品を後に出發したねえ、字品を出るときは流石の俺れも涙が出たよ。これが日本の見納めかと……」

丙「成る程、それに違ひねえ。それから……」

甲「愈々彼の地へ上陸して、乃木大將の第三軍に編入さア。して旅順をおつ取り圍むだのだ。すると敵將のステツセルも中々の人物だ。オイそれと降伏しねえで、我が軍でも随分難儀をして、三度の

飯も四度喰ふといふ始末さア」

丙「兄哥、それは違ふぢやアねえか、三度の飯を二度ぢやアねえのか」

甲「それは他の奴だ。俺れは皆んは知るめえが宜い親戚を持つて居たから、それは樂が出来たんだ」

乙「兄哥に、偉らい親類があるのかい」

甲「そうよ、乃木大將は俺れの叔父さんに當るのだ」

乙「またそろ／＼嘘の始まりかねえ」

斯様な無邪氣の話をして居ります。書生の山本は幾度か閣下の顔

を見守りますから、

乃「山本ツ、けふは孤兒院の事務員が旅行ぢや、汽車は三等に限る中々愉快なものぢや。二等杯に乗つて見ろ。又一等などに居るものを見ろ、共に差し向ひに腰を掛けて居り乍ら物をもいはず互に見合ひて敵同士の様ぢや。甚だしき奴はカバンを枕にと寝る。老人が来ようが婦人が乗らうが、更に席を譲らうともせぬ。それに反して此の三等は宜い、今起つた彼の若者が老人に席を譲て、自分分は起つて辛抱して居る。暖き心を有して居るは喜ばしい。三等室は一口噺をなさるものも多い。これを聞くも愉快ぢや」

乃木大將

—(二)—

いつしか小佛、筐子のトンネルも通過いたしまして、列車が停まりました。此處が上諏訪でございます。

こゝに下車いたされた閣下は、

乃「山本ッ、此處がスケートをやる上諏訪ぢや。旅館には諏訪ホテル杯といふ有名なものが有る。今夜は此處へ一泊しよう」

山「それでは、諏訪ホテルへ投宿いたしませう」

乃「贅譯なことを言ふな。この服装を見る、これで諏訪ホテルへ行けるか、向ふに宿屋が見へる。彼れへ行つて一泊しよう」

山「彼れは木賃宿でムいます」

乃「木賃宿でも構はん。たつた一と晩ぢや。どんな不自由でも忍ぶぞ」

來られましたのは、商人旅館の角口、

乃「御免なされ」

女「入來つしやいまし」

乃「今夜、兩人止めて貰らひたいのだが、都合が出来るか」

女「お氣の毒でムいますが、今晚は團體のお泊りがムいまして、廣間は空いて居ません。彼の三疊の間が空いて居りますが」

乃木大將

乃「ア、左様か」

女「三疊の間では如何でせう」

乃「それでよろしい。宿錢は何程ぢや」

女「お一人前が、四十錢で宜しうムいます」

乃「左様か、二人なれば八十錢ぢやな」

女「ハイ、どうぞ……」

女中の案内で閣下はすましたもので、書生山本と二階の一と間へ通られます。

やがて茶が出る。

乃「山本ッ」

山「ハイ」

乃「俺れとお前が泊つて、宿錢が八十錢だ。茶代は幾何程だか解らぬが、直ぐにビールを飲ませるとは氣に入つた」

山「それはビールではムいません」

乃「何んぢや」

山「麥湯でムいます」

乃「麥湯か……、此奴一本參つた。何によいぢやアないか、麥湯もビールも麥の中ぢや。ビールを飲むで居る考で飲まう」

と麥湯を飲まれて居りますと、宿屋の主人が上つて参りまして町
亭に挨拶をいたし、宿帳を差出して、

「お客様は、本日は嘸ぞかし疲勞でムいませう。遂ひ一寸と忙が
しくて、お取持ちもいたしませんで誠に濟みません。就きまして
は宿帳へお所とお名前をお記し下さいまし、警察へ届けなくては
なりませんから、御厄介様でもお願ひ申します」

流石の閣下も、これには痛く迷惑いたされます。木賃宿に泊つた
からとて、偽名を認む譯にも行かぬ。暫時考へて居られました。そ
こで宿帳を取つて、サラ〜と書かれました、

乃「御主人これでよろしいな」

「御手数敷様でムいました」

——(三)——

二階から下りて披いて見ると……東京赤坂新坂町……

「オヤツ、あんな服装をして居ても東京者かしら……、何う見て

も田舎者にしきやア見へぬが」

また、その姓名は……乃木希典……。

主人は暫し考へて居りましたが、抜き足差し足再び二階に上りま
して、襖を細目に開けて窺ひます。

乃木大將

すると何にか気が附いたものと見へまして、周章て下に降り來つて、

主「オイ嬢や」

女「何んだよ」

主「大變だ」

女「何にが、大變なんだよ」

主「聲が大きい」

女「エツ」

主「彼の日露戦争の雑誌を出せ」

女房が取り出しました一冊の雑誌は、大阪新報の記者行支李風氏が、日露戦争の當時、日露戦史として發刊いたされたもので、

先づ最初の二頁を披ひて見ますと、將軍の寫真が軍服姿で嚴めしく、馬上ゆたかに起つてゐいます。

大將の姿を見ました主人は、我が家を飛び出して其の筋へと届け出ました。

大將とも言はるゝ閣下が、そんな木綿の粗服で質素な姿をと……署長も最初は怪しみました、乃木閣下の質素を重せらるゝといふ

乃木大將

お話しもムいますから、早速部下の者を引連れまして、旅館へと出張いたします。

すると、成程違ひもない正銘偽りのない陸軍大將乃木希典閣下でムいますから、早速町長も呼び寄せるといふ大騒ぎをいたしました。

町長や、町の重立つたものは、早速フロックコートや袴羽織の禮装をいたし遣つて参りまして、閣下に御目通りの上、

町「此處では甚だ御粗末でムいますから、何うぞホテルへお越しを願ひます」

乃「イヤ、一人前四十錢の旅籠の方が氣樂で……」

町「ヘエ、、、どうも恐れ入ります。何卒ホテルへ……」

強いての懇望でムいますから、閣下も折角の厚意を無にするもと思召されて、諏訪ホテルへ御轉宿を遊ばされます。

——(四)——

ホテルでは、既に町長から命令がムいましたものと見へて、特別室を立派に飾立て、藝妓や女中では御無禮になるとて、我が家の娘でお茶の水女學校を卒業いたしました玉枝に花枝と申す姉妹に、御膳を運ばせ御給仕として侍らせます。

勿論膳部は、山海の珍味を集めました御馳走を揃へましたが、どうしたことが、閣下は箸をも執られず控へて居らつしやる。書生の山本は腹が空いて居て、眼の前に大層な御馳走を並べられてあても御主人がお手を出されないのですから、涎を垂らして恨し想に眺めて居ります。

稍々あつて徐ろに閣下は口を開かれ、

乃「これは非常の御馳走で辱けない。が軍人の口には過ぎたものぢや。兼て土地の名物と聞た蜆の味噌汁でも貰ひませう、ことは些少に似たれど、斯ういふことをしては町の不利ぢや。凡て物事は

質素にいたしたらよからう」

と、仰せられましたので、町長始め一同は唯々恐縮の外は仏いません。そこで早速蜆の味噌汁を調べて差出しますと閣下は、いとこれを心地よく召し上げられて、その夜は諏訪ホテルに一泊いたされます。

其の夜の中に、松本市へは明日乃木閣下のお越しになる趣を電報で知らせますから、市中では大評判でムいます。

甲「オイ、明日は軍の神様の乃木大將様が、松本へ此來臨だ」
乙「どうしても、お顔を拜まなければならぬ」

など、申しまして大騒ぎで、翌朝は停車場に歓迎の人々が黒山の如く、います。

其中、列車が著きますと、

甲「萬歳……、乃木將軍萬歳……」

其の聲は天地に響き渡り、停車場も顛覆かへるばかりの有様で、います、一向將軍の姿が見へません。

これはお乗り遅れになつて、次の列車で一同は待つて居りますと、やがて次の列車が到着いたします。

甲「萬……歳……、乃木將軍萬々歳……」

ところが、矢張りお見へになりません。

乙「何うしたのだらうか、將軍がお見へにならない」

丙「なんでも話の様子では、閣下は至つて質素なお服装だと聞いたから、ことによると普通のお客と紛れて出てしまはれたのではな
いか」

乙「そんなことも有るまい。何うかなさつたのだらう」

列車の著くごとに、萬歳を連呼いたしてお待受けいたすが、更にお見へんいません。

甲「ヤイ、お前嘘を吐ひたね」

乃木大將

乙「嘘なら斯如やつて、澤山な人が出迎へに来るものか」

甲「だつて、来ないぢやなか」

乙「でも、仕方がない」

甲「仕方がないぢやないよ、乃公は仕事をして居たんだが、乃木大將様がお見へだと、お前が言ふものだから、仕事を休むでお迎ひに来たんだ、此の嘘付き野郎奴ツ」

乙「何にを言つて居やがるんだよ、来ないものは仕方がない」

甲「仕方がないと、何にッ此の嘘付き奴ツ」

一言二言争つて居りますと、ボカン／＼と殴り合ひが始まるなど

といふ大騒ぎもございます。とう／＼三時過ぎまで、待ちに待ちました。が、一向にお見へがムいませぬ。

—(五)—

それは無理もムいませぬ。閣下の主従は、松本から一つ前の村井と申す驛で下車いたされまして、其れから地藏院といふ先祖佐々木高綱の御墓を指して行かれたのでムいます。

豫て御承知でもムいませうが、佐々木高綱は、彼の宇治川の先陣で名高いお方でムいまして、鎌倉を去られてから雲州松江在の乃木村に住はれ、そして佛門に歸依いたされ、諸國遍歴の途すがら信州

の村井驛にて、病氣に罹かられ歿せられましたので、其の遺骸を葬りましたのが地藏院で亙いまして、何人が建てましたかは不明で亙います。佐々木氏の墓と碑に記されて亙います。

偕てこれへ参詣いたされようとした閣下は、

乃「山本困つたな、餘程寺が寂れたようぢや。服を更める處がない此の服装では先祖の墓に詣づるは不敬である。何んとかして禮服を著更へる處はなからうか」

山「ハイ……、ア、恰度宜い處が亙います。向ふに腰掛け茶屋が亙います」

乃「オ、成程左様ぢや」

そこで、腰掛茶屋へと参られ、

乃「御免なさいよ」

婆「ハイ、旅の人お休みなさい」

乃「天氣が続いて、婆さん結構ぢや喃」

婆「ハイ、もう此の頃は百姓が忙しい時で、天氣の能いのが何によりでなア」

と、溢茶を持って参ります。

乃「婆さん大分年を老つて居るぢやが、丈夫の様に能く働くのう」

婆「ハイお蔭で丈夫でムいます。マア死ぬ迄斯うやつて働きます」
乃「婆さん少々尋ねたいが、此の先方の寺が地藏院といふのぢやの
う」

婆「ハイ、左様で」

乃「彼の寺の中に、佐々木高綱の墓があるといふが左様か」

婆「ハイ在りますよ」

乃「誰れか参詣する者が有るか」

婆「墓にも、流行不流行があるものと見えへて日露戦争の時は随
分参詣に来る者もあつたわい」

乃「左様か」

婆「何んでも、旅順で戦争をした乃木つて奴の先祖が、佐々木だと
いふて、来るものが澤山あつた」

乃「左様か喃」

婆「けれど、妾や乃木つて奴の先祖だと聞ひてから、参詣に参りま
しねえだ」

妙なことをいひ出しますから書生の山本は、婆さんの顔を穴の明
くほど見睭めます。

婆「乃木つて奴は、妾しには敵だよ」

乃木大將

捨て置きぬ此の一言に、山本はツカ／＼と婆さんの傍に肉迫て、
山「何んで婆さんは、乃木大將のことを其んなに……」

問はれた婆さんは、眼に涙を霑はせながら、

婆「それは旅の人、斯ういふ譯だ。語れば長いことだ……。用があつて町へ行き、親子連れの人を見ると思はず涙が流れます。それといふのは今更らいふのも愚知のことだが、天にも地にもたつた一人の悴を、二十一の其年に高崎聯隊に取られて、三年勤めて歸りました。嫁を貰ふ一人の子供が出来ます。夫婦仲も睦しう暮らす中、去年の戦いで召集され、向ふところは旅順に……」

婆さんの眼は一杯の涙が、

—(六)—

婆「すると悴は正直者ぢやから、乃木といふ大將が其正直を附け込んで、悴を危ない處にばかり突ん出したものだから、彈丸に中つて……しゝゝ死にました」

言終るや。

ワツと、婆さんは泣き倒れます。

折から學校歸りと見へまして、破れ靴を小脇に抱へ、入り來たつた一人の兒童は、これは此の婆の孫に當ります即ち名譽の戦死者の

遺子でムいます。

見「お婆さん、今歸つたよ。なんだお客様が居らつしやるに、又泣いて居て」

婆「オ、孫や戻つたか……。遂ひ死んだ伴のことを思ひ出してな

ア……」

見「お婆さん、けふも先生が左様仰ひましたよ。乃木大將様が松本へ來られるので、また家のお婆さんが、思ひ出して泣くだらうが決して泣いてはならない恨らんでもならない。乃木大將は軍の神様である。御自分のお子は二人迄も戦死いたされて……。ホラお

婆さんこれが乃木大將の肖像に、先生が書いて下さつた歌だよ」

婆「……」

見「一人息子と泣いては濟まぬ、二人殺した方もある。一人息子と恨むぢやならぬ、二人亡くした人もある……。お婆さん歌の意味を知つて居るかい」

閣下は、最前から此の婆と孫との様子を打ち眺めて居られました
が、思ひは胸に餘まつて思はず進みよられ、そして其の孫を確かと抱きしめられます。

乃「オ、俺しが乃木ぢや。婆さんが恨むで居る乃木ぢや」

乃木大將

婆「エ、旅の旦那が乃木大將ぢや」

兒「オ、婆さん、先生に頂ひた寫眞……」

婆「何んで大將ともあらう方が、斯んな服装で……」

乃「婆さん、乃木ぢや希典ぢや」

兒「お婆さん、先生も左様仰つたよ。乃木大將様は美しい服装をした

りして贅澤をなさらない方だと、軍人は質素でなければならぬ

と……」

婆「では眞實の乃木様で……。エ、何んでお恨み申しませう。只今

の失禮はお許し下さい。此の婆は定めし伴達を殺して自分一人で

美しい衣物を着て贅澤な暮しをと……。エ、お息子様を二人迄も

殺して、天子様のために……。お許し下さい、勘忍して下さいま

せ」

老婆は地に跪きまして、其の失言の罪を謝します。

閣下は、多分の金子を恵まれたといふお話でムいます。

壯烈なる乃木大將の御最後は如何でムいましたらう。それは今申

上ぐる迄もムいません。

武士道の精華である。軍の神である。と廣い世界に英名を轟かさ

れた閣下は、君に忠節を重せられましたは勿論、また能く質素を守

られまして、常に其の服装は決して絹布を纏はれたことなく、又其の住居の如きも至つて質素でムいますことは、一とたび赤坂新坂町なる閣下が遺邸を御覽遊ばされたならば、能く忽に知り得られる、
でいませう。

無雙の駿馬

(山内一豊)

—(一)—

西に東に英雄豪傑は起りまして、世は麻の如く亂れました。これが所謂天正時代の群雄割據といふのでムいます。

其の最後は憐れ本能寺で、叛臣明智光秀のために亡ぼされましたが、一方の大將として其の名も高い織田信長といふ主將がムいました。

すると、或る日のことでムいましたが、此の織田家の士が屯いた

して居ります安土に、一頭の駿馬を牽き来たものがムいます。

商「この馬は、東國第一の駿馬でありますが、何うか誰方かお買ひ
上げ下さいませんか」

言はれて、織田家の士の面々これを見ますると、成る程誠にまた
と無い駿足でムいますから、

甲「成る程逸物である」

乙「昔し宇治川に先陣を争ふた佐々木の池月、梶原の磨墨もこれに
は及ぶまい」

丙「實に東國一の馬は、日本一の駿馬ぢや」

この駿足を見る士の面々は、誰れもく驚く程の逸物でムいます
から、垂涎三千丈の體でムいます。

商「如何でムいませう、お買上げは……」

甲「其方が自慢する丈けの價値はある。して其價は幾何であるか」

商「ハイ、お懸引致さんところが十兩金でムいます」

甲「ウーム十兩か……」

商「左様でムいます。十兩では決して高價ものではムいません。中
中二度と再び斯様な逸物は手に入りません」

いふ迄もないでムいますが、其の當時十兩金の名馬と申しますと

今日の幾千圓か、或は一萬圓位にも相當いたしましたものでムい
すから、誰れも逸物ではムいまして、其の價に驚いて買求めよう
といったすものがムいませぬ。

乙「成る程、名馬丈けに十兩金か……」

丙「無雙の駿足であるな」

譽め立てる計りで、誰れ一人買求めようといふものがムいませぬ
から、馬商人は止むなく牽き戻り行きました。

すると、織田家へ仕へまして日未だ浅い家來に山内一豊といふ方
がムいましたが、此の一豊も其の價の高貴に、他の面々と同様に欲

しいには欲しいが、求め得かねまして非常に心に残念がつて、其の
日は我が家へと歸ります。

——(二)——

心は色に現はるといふて、心の中で嬉しい事がムいすれば、顔
の色迄も何處となく嬉しく、また心配がムいすれば、如何に隠さ
うといたしても、顔に心配の色が浮ぶものでムいます。

一日の勤務を終へて、我家へと戻りました一豊は、妻が差出しま
す夕餉の膳へと對ひました。

すると、けふ東國一の駿馬を見て、ア、彼の駿馬を我が手に入れ

て、雄々しい姿をいたして見たい、イザ一と戦といふ砌は、彼の駿馬に打ち乗りまして、勇ましい功勳を顯はしたい。が駿馬を求めぬの十兩金といふ莫大な金子がない。ア、我が家の貧しひために見す思ひも通らぬと、心の中に切りに思つて居りますから、其の心の思ひは自然と顔に現はれて居ります。

夕餐の膳に對ひました一豊の顔を、何心なく眺めた妻は、其の色が憂慮に閉されて居りますから、

『如何遊ばされましたるにや、お顔の色の優れ玉はぬは……』

一豊は、妻の優しき問ひに、手に持ちし箸を置かれて、

山 實は、けふ東國一の駿馬なりとて、馬商人が牽き來たる逸物あり。士の面々何れも稀に見る名馬なれば、購ひ求めんとて其の價を問へば、十兩金といふに餘り貴しとて、誰れ一人求めんものなかりし我れも其の駿馬望ま欲しけれども、如何で身貧しくして、大金十兩の貯へもなく、實に口惜しかりき。我れ御奉公の初めに、天晴斯かる名馬に跨りて、家形の前に打ち出づべければ……、嗚呼これも黄金のためなり。十兩金の貯へもあらば……』

妻はつくづく話の次第を聞ひて居りましたが、やがて靜かに口を開きて、

妻「只今十兩金が揃のはい、其の名馬を購ひ得べきや」

山「オ、十兩金が……」

妻「未だ馬商人は遠くに去るまじ。又何人の手にも渡るまじきや」

山「十兩金といふ高貴の駿足、誰れも我れも同じく望みつれども金のためまだ購ひ能はざるべし」

妻「然らば、其の駿馬お求めあるべし。只今其の料を参らさん」

と、妻は突と起ち上りまして、襖押し開き取出しました鏡臺の中から鏡を、そして其の鏡の奩の底から、十兩金を出しまして夫一豊の前へと差出しました。

見るからに美しい山吹色の小判が十枚。眼の先きへと妻が並へましたから、一豊の驚きと喜びは一と通りでは無いませぬ。

山「オ、何して此の十兩金が……」

妻の顔と、光る小判とを眺めつ尋ねます。

妻「ハイ此の十兩金は……」

山「何うして其方が……」

妻「ハイ、此れには深い仔細が……」

山「その仔細を……、早く語られよ」

妻「仔細と申すは、實は妾が此家に参りし時……」

山「さては其方が持参いたせしにか。我れ此の年頃いと貧しくて苦しきことのみ多く、例令一兩金の餘りたりとも……」

妻「妾が父は、此の鏡の下に入れ給ひて、あなかしこ世の常のことに、ゆめ／＼用ふべからず。汝が夫の一大事の時に進らせよと戒められしもの……。平素々々出来得る限り質素に質素を重ね、此金子ばかりは無きものと心得て、如何に貧しき苦しき時にも取り出さずして、けふが今日迄貯へ置きたり」

山「さては、日頃貧しき苦しき暮しの中に、質素に質素を重ねての……」

妻「妾は、衣の汚れも何に厭ふべきや。口に美しからぬ食物も何にいとふべきや。質素を守りし甲斐ありて、けふが今日迄此の十兩金を失はずして、今我が夫の出世のそれに参らさんは、實に心嬉しく速にその駿足を購ひられよ」

山「然らば、東國一の駿馬を求めて……」
一豊の喜悦は如何計りでございましたらう。實に天にも登る位でございましたに相違はございません。

妻「聞けばこの度京洛にて馬揃へあるべしと承はる。此のこと天下の見物なり。能々駿馬召して見参遊ばせよ。妾の喜び嬉しさもま

た一方ならじ』

妻がいふ儘に一豊は、早速件の十兩金を懐中にいたして、

山「未だ遠くは行くまじ』

と、馬商人の後を追ひ、東國一の駿足を手に入れました。

さて程なく京洛にて、馬揃へがふいましたから一豊は、件の駿馬

に打跨つて出ますと、主人信長公はこれを御覽遊ばし、

信「オ、一豊其方は天晴れなる名馬を……』

山「ハイ、東國一と誇りまする名馬にてぞ』

信「東國一は愚か、實に日本にまたと類ひなからん……。して如何

にして手にせしや、定めし其の價も貴かりしならん』

と、その逸物を手に入れましたをお尋ねになります。

そこで、事の仔細を打ち明しますと、主公信長公は其の妻の心根

をばいたく感心いたされて、

信「弓箭取る武士の妻として、是れに過ぎたるはなし』

と、お譽め詞を頂戴いたし、それからと申すものは次第に重く用

ひられました、後には土佐守を名乗る様にと出世いたしました。

これは申す迄もなく、一豊の妻が平素から、現今の詞で申します

と、虚榮を捨て、質素を重じまして、嫁入の際に父から給ふた十

両金をば、空しくいたさなんだが爲めでムいます。

質素が夫の出世のためとなつたのでムいましたして、一豊の妻と題されて、永く此の佳話は傳へ傳へられます。

紺緋と紋服

(藤室令夫人)

——(一)——

日露の戦役が芽出度く大捷利萬々歳となりまして、出征軍は何れも凱旋いたされます。

武功赫々たる近衛師團が凱旋いたしますや、大島師團長閣下に抜擢いたされて、其の參謀長となられたは藤室砲兵大佐でムいます。

この大佐の令夫人は節子といはれて、大佐が未だ中尉時代に、夫人が女子學院を卒業いたさるゝと同時に結婚いたされたのです。

藤室令夫人